

Newsletter

June 2022

<http://www.aack.info>

目次

1970年代スキー山行	吉野コッペさんとの60年
1974年～1980年初頭の湖北、嶺南などスキー登山の記録	上田 豊20
ゴローの山スキー回想録	コッペさんの一代記
甲斐邦男1	前田 司24
70年代のスキー山行	農生の先輩コッペさん
岩坪五郎6	斎藤清明25
70年代スキー山行—おもに遠出の計画—	「平井一正先生を偲ぶ会」出席報告
横山宏太郎11	上尾庄一郎26
吉野熙道さん追悼 (2022年2月10日逝去)	第54回雲南懇話会 (京都フォーラム) 講演概要 (その1)
脱皮し続けた男	山岸久雄27
栗田靖之15	会員動向32
コッペさんはやさしかった	編集後記32
田中昌二郎17	
稀有なるクライマー吉野コッペさんを偲ぶ	
木村雅昭18	

1970年代スキー山行

1974年～1980年初頭の湖北、嶺南などスキー登山の記録

甲斐邦男

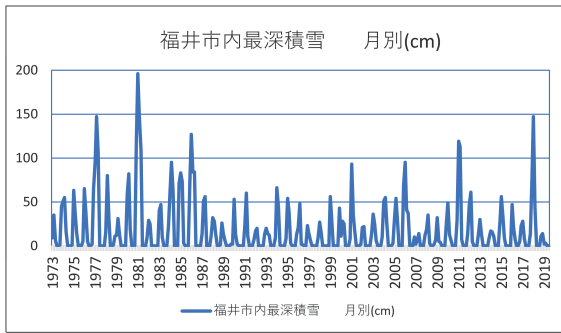
1. はじめに

ヤルンカンの報告書作成の目処が立った1974年の春に、岩坪五郎（ゴロー）さんから、スキー登山に行かないかと誘いがあったのが、一連のスキー山行の始まりです。対象の山は、当時の感覚ではスキーの延長で登山とは認識していなくて、正確な記録は書いていなく、また、この時代のスキー登山の記録はAACKの報告でも見たことがありません。このレポートは私の断片的メモ、ルートを記入した地図、写真とその裏書き、記憶などから作成したもので、不

完全な記録です。参加したが記名されていない、または不参加なのに記名されている方々にはお許しください。また、敬称は略です。

2. 当時のスキー登山の状況と積雪

ヤルンカンの登山隊が終わり、今後の活動の展望はAACKになかった時代です。木曜会の活動も不活発になりつつあり、ヤルンカン以前のだれも来ない閑散たる状況になるのではないかと危惧されていました。スキー登山を基に木曜会を活発化しようという考えが先達にはあっ



たと思います。スキー登山を実行することで、木曜会には人が数年間は集合していました。

ヤルンカン以前は、木曜会に人が集まらないので、当然スキー登山などは考えられませんでした。また、世間でもスキー登山はそれほど行われていなかった。例えば、スキー道具は、旧来の道具で、スキー締め具はカンダハーで、靴は登山靴が多かった。ただし、ゴローさんや荻野和彦（ヤンボー）さんは、既にスキー登山を始めていたようで、スキー道具は私よりは進歩していました。

この頃は、積雪が現在よりも多くあったようで、湖北、福井嶺南、奥美濃などの比較的低い山でもスキー登山が十分楽しめました。図1に示した福井市内の月別最深積雪では、1970～80年代は多少多いように見えますが、それほど顕著ではありません。

実際は、花脊や伊吹山のスキー場は営業していました。積雪のため、京都バスは貴船止りで、花脊へは徒歩で花脊峠へ、旧花脊峠からはスキーを付けての滑降です。伊吹山は頂上までシールを付けて登山し、帰路は頂上からの滑降でした。他にも、今回の表から漏れている山行はたくさんあります。例えば、比良の権現山、湖北の野坂山などで、記憶や記録の外にある対象の山は多数あります。表1に実績をまとめました。

3. スキー登山

3.1 取立山 (1307m : 1974. 2)

最初のスキー登山は、ゴローさんが車、運転手や食事を出すから、シェルパとしてスキー山行に行かないかと、私と森本グロンにお誘いがあったのが、そもそもの始まりでした。ゴローさんの目論見では、ヤルンカンで強かった甲斐邦男（カイ）と森本陸世（グロン）をシェルパ

として雇えば、悠々と取立山スキー登山ができるはずでした。ところが、積雪は十分にあったのですが、雪質は悪く、シールに10～15cmぐらいつくような湿雪で、行程ははかどらなかつた。計画よりかなり下でサーブのゴローが幕営を決断、命令しました。そしたら、二人のシェルパがあつという間にテントを設営しました。「サーブ、ティー」と言って紅茶を出したかどうかはわかりませんが。サーブとしては、それぐらいできるのであれば、もうちょっと先に進まないかと言う感じであつたらしい。

3.2 法恩寺山 (1357m ; 1975. 2)

ゴローさんが、初めて8mm撮影を行いました。これは、ゴローさんによると、8mmカメラで転倒する映画を撮影し、多くの皆さんにこれではいけないと思わしめたらしいです。その結果、いかにスキー技術が劣っているのか、私を含め多くの参加者が実感しました。この映像はどこかにあるかもしれませんが。滑降の映像では、画面の左から右、右から左に斜滑降で多くの人が消えて行った。また、山回り停止または転倒後、キックターンしての方向転換、樹木を支点の停止、回転に、衝突など、クリスチャニアにはほど遠く、とてもスキー滑降の画像とは見えないものでした。

多くの参加者は、笹ヶ峰スキー合宿の指導などしたことのある人々で、それほど下手なスキーヤーではなかったはずですが、雪質が悪く、これまで練習した技術ではとても太刀打ちできませんでした。いわゆるブレイカブルで、表面はクラストし、その下は軟雪で、スキーにとって難しい雪質でした。スキー登山を楽しく行うには、悪雪など多様な雪質に対応した技術の習得が必要と感じました。また、スキーは登山の道具ではありますが、登行用だけではなく、下山の滑降用の道具でもあることを実感しました。

3.3 ワラビ平スキー場で合宿 (1976、1977)

法恩寺で惨めな経験をしたので、スキー技術向上のため、ワラビ平スキー場で春休みにほぼ毎年スキーを行った。これ以外にも、函館山、マキノなど近郊のゲレンデでスキー練習を積極的にしている。

3.4 乗鞍岳 (3026m、1978. 4)

私がスキー道具を買い換えて、カンダハーからジルブレッタへ、スキー板はヒッコリーのゲレンデスキー用からオガサカへ。当時の感覚では、ラッセルでの登行に足下が非常に軽く、カンダハーとは比べものにならなかったことをよく覚えています。スキーを快適にする一つの方法は道具です。ゴローさんが言っていたように、「スキー上達の方策の一つは道具である」ことは実感しました。ただし、さらに古い時代の1956年コルチナダンペッツオのトニー・ザイラーや猪谷千春は、登山靴よりも背の低い靴で競技していました。

3.5 太郎山(2326m)、薬師岳(2973m、1976. 4)

有峰から入山して、薬師岳往復のスキー登山でした。山スキーの情報が当時多くあったかどうかはわかりませんが、ルートは登山ルートに沿って太郎山へ、太郎山から尾根ルートをとって薬師岳往復のスキー登山でした。行って見れば、この頃には既に北アルプスの春にスキーをする人が結構いて、太郎小屋ベースで薬師岳のカールを滑っていました。また、太郎山からの下山に谷ルートがあって、谷ルートではかなり滑降できるようでしたが、我々は、情報が乏しかったので、安全を考えて、尾根ルートをとりました。それでも、薬師岳～太郎山の間は十分に滑降できたし、当然、太郎山からの尾根ルートもかなりの滑降ができました。

3.6 スキー技術の向上と遠出山行

ある程度スキー技術が上達して、山スキーが結構できるようになり、湖北以外にも奥美濃、アルプスなどに出かけました。柵池～乗鞍～蓮華温泉～朝日岳(2418m、1977.3)は柵池から乗鞍を経て蓮華温泉、蓮華温泉から朝日岳を登り、頂上からの大滑降でした。もう一つ雪倉岳も計画していましたが、沢の徒渉の問題で中止となりました。また、針ノ木(1978.3)は針ノ木谷と針ノ木沢を滑降する計画でしたが、針ノ木西尾根の途中で時間切れのために中断。また、劔岳一周(1978.5)は室堂から劔沢、劔沢から別山尾根で劔岳へ、劔岳から平蔵谷の滑降。さらに劔沢から池の平小屋へ行き、小黒部谷～大窓～中仙人谷～馬場島でこれは成功でした。これを書いていて、室堂～別山乗越～奥大日岳～

大日岳～早乙女岳が記録から落ちていることを思い出しました。

4. まとめ

この記録は不完全なもので、登山対象、参加者にも欠落があります。もっと正確な記録をもっている方がおられれば、追加修正されることを期待します。また、1980年以後も継続してスキー山行は行われていて、この記録も追加していただければと思います(表2)。

ついでに余分ですが、記録を整理していて気がついたのですが、スナップ写真や芸術的な写真よりは、記録として有用な写真は頂上の道標をいれた参加者全員の万歳写真です。

追記

参加者からいくつかのコメントをもらいました。

田中昌二郎さん

「上尾山荘の手前でホーデン(宝田)がバテバテになっていたので、茶飲むか?と言ったらイラン、ビールや!と返事した。また、1977年の御嶽の上尾山荘で、大勢が重なり合って眠り、山荘裏から御嶽をめざしたのですが、藪と狭い尾根ルートで敗退し、滑りというより転げながらようよう帰着した記憶があります。また、年度不明ですが、大雪が降ったので、岩坪邸に集合?して伊吹山をめざし、頂上からあの正面のルンゼを転びまどいつ下った記憶があります。伊吹山も快適な滑降ではなかった。林学の喜多山さんいた?」

岩坪ゴローさん

「甲斐が新品のスキーをもってきたのはいつ?上尾さんが汽車の中で痛飲し、タクシーから降りるなり倒れ伏したのは、御嶽?同志社の平林さんと妙高に行き、我々が優位に立ったのはいつ?工織大の荒木さん、橋本伊織さんがいて、甲斐がスリッパの上から靴を履いたのはいつ?今のところ以上です。」

前田 司さん

「スキーの表はいい資料ですね。私は初期の1975年の報恩寺と1976年の月山しか参加しておりません。その後皆様が精力的にスキー山行

をされているのでどんどん技術が置いてきぼりになってしまいました。月山に行った時フランスパンとワインというハイカラな昼飯を経験してからいっぺんにワイン好きになりました。貴重な山行です。]

荻野和彦さん

・甲斐さんの原稿を読んで、「3. スキー登山」の各項のうちいくつかについて、所感を陳べます。

「3.2 法恩寺山 (1357m、1975. 2)」について
甲斐さんは岩坪ゴローさんの「みんなのスキーが下手だったから」という主張を素直に受け入れています。このころごく少数の人、中島ダンナとか横山コータローを除く大方のスキー技術のレベルはたしかにそのとおりでした。でも当時頃までは「スキーは登りのための道具、下りは斜滑降とキックターンで」という思い込みも強かったのです。口に出してそう言う者もいました。しかし、それで満足していたものは一人もいなくて、もうちょっと何とかしなければと思いつつ、どうすればいいのかについては誰も確信を持ってなかったのです。

最近、この時の8mmをデジタル化した画像を拝見する機会がありました。まさしく上で述べたとおりでした。が、この中に緩やかな広い尾根を上っている姿が映っていました。パーティーのほぼ全員が並んで歩いています。左足を出すときは全員が左足を、右足の時は全員が右足を。まるで蒸気機関車の動輪のロッドが働いているかのようにそろった動きをしていました。歩くペースは決して速くはありませんが、いささかの乱れもない見事な動きです。チームが一体となって、シンクロナイズして動いています。その様子は感動的ですからあります。京大山岳部で習って身につけたチームプレーだと思いました。これこそがこのパーティーの強さだと知ったのです。

「3.5 太郎山 (2326m)、薬師岳 (2973m、1976.4)」について

この山行は甲斐さんと荻野和彦の二人でした。5月連休は前半が雨、後半が晴という通りになり、入山はしょぼしょぼ雨の中を歩きました。林道わきにあった小屋が開いていて、中に

潜り込んでほっとした記憶がよみがえります。

薬師岳の山頂に向かったのは天気の回復した連休後半になってからでした。ふたりで歩き始めたのですが、前を行く甲斐さんの姿がたちまち見えなくなりました。山頂で「寒かったよー」と言われましたが、長いあいだ待っていてくれた甲斐さんの友情に今も感謝し続けています。

「3.6 スキー技術の向上と遠出山行」について

梅池～乗鞍岳～蓮華温泉～朝日岳 (2418m、1977. 3) は、甲斐さん、森本陸世 (グロン)、荻野和彦の三人でしたが、朝日岳頂上直下の大きな東斜面を一気に滑り降りしました。

針ノ木 (1978.3) は甲斐さんの書いているように、針ノ木岳の登頂を目指すというよりは針ノ木沢、針ノ木谷を滑ることが大きな目的になっていました。「スキーは登りの道具」主義には反するのですが、尾根を上りながら積雪深を測りましたね。黒部湖の様子が皆目わからず対岸に渡れるかどうか不安でしたが、湖面に降りてみました。積雪深が60センチ以上ありました。コータローが「南極の雪上車でも大丈夫」と保証したので、まっすぐダムサイトに向かいました。

剣岳一周 (1978.5) では、はじめから山を目指すことはなくもっぱら周辺の大きな雪渓、沢を滑ること、つまりスキーが目的でした。山を目指したかった元気な若者、カイとコータローは別途、剣岳に上ってから合流しました。剣沢を二股まで下り、北股を池の平小屋に登り小黒部谷を下り大窓雪渓の出合で二泊目でした。ここまでは真白な雪面を滑りましたが、大窓に登り返し中仙人谷、白萩川に入ると雪面には大小の岩がゴロゴロしていて雪面が濃い茶色に彩られていたのが印象的でした。

表1 スキー山行一覧 (1974-1980)

(上尾補筆 2020-10-13)

年	月	日	山名	参加者
1974	2		取立山	岩坪五郎、森本陸世、甲斐邦男
1974	4	3/29 ~ 4/4	檜平	井上治郎、岩坪五郎、森本陸世、甲斐邦男、福嶋義宏、平田和男、秋田雅規、松沢哲郎
1975	2	14	法恩寺 (1357)	上尾庄一郎、福嶋義宏、森本陸世、前田司、井上治郎、能田成、荻野和彦、甲斐邦男、他
1976	3		石徹白～野伏 (1674) ～薙刀 (1647)	井上治郎、横山宏太郎、荻野和彦、山口克、森本陸世、能田成、岩坪五郎、甲斐邦男
1976	3		ワラビ平	
1976	4		乗鞍岳 (3026)	上尾庄一郎、能田成、岩坪五郎、甲斐邦男
1976	4	4/2 ~ 5/1	月山	岩坪五郎夫妻、森本陸世夫妻、前田司、能田成
1976	5	2	太郎山、薬師岳	荻野和彦、甲斐邦男
1976	12	25 ~ 30	笹ヶ峰ヒュッテ	岩坪五郎、井上治郎、森本陸世、名古屋美男、横山宏太郎、吉野熙道
1977	2	11 ~ 13	御嶽 (上尾山荘)	中島道郎、岩坪五郎、荻野和彦、上尾庄一郎、前小屋端、宝田克男、吉野熙道、能田成、田中昌二郎、井上治郎、森本陸世、甲斐邦男、横山宏太郎、矢吹和之
1977	2	26 ~ 27	金糞岳 (1227)	山口克、岩坪五郎、荻野和彦、宝田克男、能田成、福嶋義宏、甲斐邦男
1977	2		蛇谷	甲斐邦男
1977	2		毘沙門 (1385)	横山宏太郎、甲斐邦男、森本陸世、井上治郎、荻野和彦、能田成、他
1977	3	4 ~ 7	ワラビ平	森本夫妻、甲斐邦男、横山宏太郎・陽子、能田一家
1977	3	19 ~ 21	加越国境 赤兎岳	斎藤惇生、岩坪五郎、上尾庄一郎、能田成
1977	3	23	乗鞍岳 (2437) ~ 樽池 ～朝日 (2417)	森本陸世、荻野和彦、甲斐邦男
1977	3	13	寒風峠	甲斐邦男
1977	3		鈴鹿霊仙	冒険クラブ、荻野和彦、岩坪五郎、斎藤惇生、能田成、山口?
1977	5	3	池の平～小黒部	甲斐邦男
1978	2	11 ~ 12	石徹白～檜峠～毘沙門	荻野和彦?、他多数、今井一郎ら若手2人、甲斐邦男、上尾庄一郎、
1978	2	26	醒ヶ井～霊仙	山口克、岩坪五郎、荻野和彦、四手井靖彦、西川、能田成、甲斐邦男、他1名
1978	3		扇沢～蓮華岳～針ノ木	岩坪五郎、荻野和彦、横山宏太郎、甲斐邦男
1978	4	4 ~ 8	尾瀬～至仏山	岩坪五郎夫妻、荻野和彦、能田成
1978	5	2 ~ 5	剣岳一周	中島道郎、岩坪五郎、荻野和彦、能田成、甲斐邦男、横山宏太郎、高田光政
1978	5	28	雨乞岳	岩坪五郎夫妻、甲斐邦男
1979	1		笹ヶ峰ヒュッテ～黒沢岳	山口克、岩坪五郎夫妻、上尾庄一郎、田中節子、安田隆彦、牛田一成、大田岳史、北上田毅、甲斐邦男
1979	3	31	笹ヶ峰～美濃股山～三国岳	今西錦司、上尾庄一郎、荻野和彦、四手井靖彦、田中節子、岩坪五郎夫妻、井上治郎
1979	4	28 ~ 5/2	飯豊山、三国岳	山口克、岩坪五郎夫妻、橋本伊織、福嶋義宏、井上治郎、横山宏太郎、甲斐邦男
1980	1	3	御嶽 (上尾山荘)	岩坪夫妻、上尾庄一郎、田中節子、西山孝、甲斐邦男
1980	2	～6月	チョモランマ	斎藤惇生、甲斐邦男、横山宏太郎

表 2 1980 年以降

年	月	日	山名	参加者
1980	2	9～11	福井県部子山 (1464)	井上治郎、岩坪五郎、能田成、荒木、高田、橋本伊織、宝田克男、上尾庄一郎、他
1980	5	3～5	白山	岩坪五郎、上尾庄一郎、橋本伊織、能田成、井上治郎
1980	12	25	笹ヶ峰ヒュッテ	
1981	1	7	マキノ	中島道郎、高野昭吾、上尾庄一郎、他多数
1981	1	18	八ヶ峰	岩坪夫妻、上尾庄一郎、能田成、四手井靖彦、西川、荻野和彦、他
1981	2	14～15	戸隠～飯縄山	泉谷洋光、原田道雄、斎藤清明、岩坪五郎、能田成、上尾庄一郎、横山宏太郎、他
1981	2	23～24	神鍋山	今西錦司、能田成、ほか？
1981	3	7	野坂岳	岩坪五郎、上尾庄一郎、原田道雄、橋本伊織、能田成
1981	3	21～22	能郷白山	岩坪五郎、上尾庄一郎、原田道雄、橋本伊織、能田成
1981	4	18～20	富山県鉢伏、今西登山	今西、高木、山口克、岩坪夫妻、上尾庄一郎、福嶋義宏、能田成、秋野、荻野和彦、榊原雅晴、
1982	12		笹ヶ峰ヒュッテ	岩坪五郎、井上治郎、田附重夫、沖津文雄、能田成
1983	2		関温泉～神奈山	宝田克男、高村奉樹、竹内、田附重夫、松浦、井上治郎、松林公蔵、横山宏太郎夫妻、沖津文雄、寺本巖、能田成、橋本伊織、福嶋義宏、前小屋端、前田司

ゴローの山スキー回想録

岩坪五郎

1954年、2浪の末やっと農学部合格、直ちに山岳部に入部を申し込んだ。しかし、わたしの登山能力は劣悪であった。ボッカ、岩登り、地形・気象の判断、みなダメ。しかしそれに対する劣等意識を不思議に持たなかった。冬の笹ヶ峰合宿では問題なく、下手の御三家のトップであったが、退部しようなどまったく考えなかった。新人係の並河ボケさんが新人の頃、新人が全員退部したことがあって、新人をやさしく扱う風習があったのだろう。

笹ヶ峰合宿から帰京後、毎日曜日、奥マキノ、愛宕山などに行った。荻野ヤンボー、松浦コッテ、高野ゴジラ、潮崎パイマンたちと一緒に。当時、中島ダンナだけがスキー場のある兵庫県北部の出身であったので特異に優秀で、他の一般部員のレベルはかなり低かったのかもしれない。

5回生になった1959年暮れ、スキー合宿のリーダーとして私は笹ヶ峰ヒュッテにはいり、帰途、三高山岳部出身の山口さんから蔵平のゲ

レンデで、アン・アップ・シュテンメン（山脚・谷脚制動）クリスチャニアを習い、まともにボーゲンのできないまま、クリスチャニアができた。夜、寝袋に入ると白雪の中、白雲を駆って舞い降りていく夢を見た。1962年のサルトロカニリではスキー持参を強調し、第2キャンプではゲレンデを作って、楽しんだ。帰国後、助手に採用されて生活が楽になり、機会あるごとにスキー教室に入り、ゲレンデ練習に励んだ。上尾さんとうちの夫婦で、志賀高原のコーチを2日間やとい、トレースのない部分だけすべる練習をした。1969年冬、樋口ジャン夫妻と北大の渡辺興亜（ダン吉）さんら北大山岳部の人たちの案内でヘルベチア・ヒュッテを訪ね、北大の山スキーのレベルの高さにすっかり感心した。彼らは下級生を紹介するのに、彼はゲレンデスキーヤーで山はまだだめですなどと言った。立ったままシールを着脱するのにも驚き、彼らに追いつくのだと誓った。

その1969年は大学闘争の年であった。学生

まくいきそうな技術に集中する。叱るのではない。いいところを見つけ、褒めつづけるのである。豚どもは一斉に谷回りクリスチャニアを繰り返して始める。

帰京後、彼らは私のスキー練習についての感想を聞かれ、ゴロースキー術はバカでもできるよ、とうそぶいたらしい。彼らはそれがわたしに対する最大の賛辞であることを理解できなかったようだ。先輩の加藤泰安さんは私をズルゴローといい、山口さんはあいつには騙されるな、と云っていたらしい。私は悪気や意地悪で言ったつもりはない。

これから後、流行が変わり、前外傾スキーは内傾スキーに変わった。内傾といえば、戦前、今西錦司さんがインナーリールンとして実行していた。

今西錦司さんのインナーリールンの実演は斎藤オチョコの毎日新聞での記録によれば、1980年3月20～21日、願教寺山(1691m)登頂が目的で、今西、斎藤オチョコ以外はスキーを履いていた。このときは日本山岳会のチョモランマ登山で、斎藤Y、横山コータロー、甲斐らはいなかったが、高田光政、山本一夫らプロが無料で支援をしてくれた。

途中、今西流インナーリールンの実演をお願いした。今西さんは誰かのスキーを履き、黙って背中を丸めて回転した。先生、もういちど！と頼んだが、断られ、「背負い投げの一本背負いや」と言われた。わたしは真似をしてヤッと叫んで回転したら、それでよいといわれたが、どちらの足で一本背負いをしたのか、自覚はない。(この時オチョコ記者がつくった毎日新聞の記事と写真を掲載します。当時、今西さんは高齢の大先輩だと思っていたが、いま見ると若々しい。78歳である。)

笹ヶ峰ヒュッテでのゴロースキースクールと並行して進行するAACK若手のスキー山行も進歩した。8mm映写機を買って上映し、酒を飲ませたが楽しかった。車でいける白山、御嶽、鈴鹿などで私のサニー1000や高田の中古のベントツなどが活躍した。

今も有名なのは、1978年の剣一周スキー山行である。高田さんがドイツ帰り、ドイツ語を使いたがるので、次はウムデンツルギで行こうと云って決まった。天狗平から歩いて室堂、雷鳥沢を登り剣御前から三田平に降りる斜面は

雪質が悪く滑りにくかった。大窓に着いたとき、クラストしていたが、少し待つと溶け始め、気が付けば馬場島に降りていた。その後、北陸線を通るたびに大窓を眺め、おれたちはあそこを滑降したのだ、と威張りあった。

スキー技術では、志賀高原の入り口の急傾斜地のガイドが開発したという両脚均等荷重のパラレルスキーを好むようになり愛用したが、残念ながらその技術では甲斐に追い抜かれたことを認めざるをえなかった。

ゴロースキースクールでは、1979年入部の高尾文雄マッコウ君が全くの新人から上手になった。卒業してからも熱心でたいへん上手になったという。一度、話をきいてみたいものだ。

1985年、中国登山協会、同志社、AACK合同のナムナニ(グルラマンダータ、7694m)登頂後、私は斎藤Yさんと植木毅さんの主催する日本アルペンスキー学校に入学した。植木さんは日本や欧州で、初登頂ならぬ初滑降の記録をたくさん作った人で、高田光政さんとも親しいらしい。よそのゲレンデコーチから聞いたのだが、内脚荷重のほうが外脚荷重より速度が出る。それは滑走競技でスキーよりボードのほうが速いことで証明されているとのこと。しかし、植木流の滑降は速度の問題ではなさそうだが、私にはわからない。

それからあとどれほどスキー山行にいそしんだか、記憶にない。1983年頃助教授に昇進しているので、山ばかり行くのははばかられたのだろう。1991年梅里雪山の大遭難では、留守本部の責任者として、AACK副会長を引責辞職した。1974年のK12遭難に次いで2度目であった。

大日岳の事故と事件

2000年、滋賀県立大学名誉教授になっていたヤンボウから電話があった。高田光政の後輩の山本一夫が、文科省主催の大学生対象の研修会でリーダー(主任講師)として行動中、大日岳山頂で、巨大な雪庇の崩落があり、2人の学生が遭難した。主催者である文科省と遭難学生家族の関係はスムーズでなく、山本らは地元警察から業務上過失致死罪の容疑で取り調べを受けている、支援してあげたいと。

親しくしている芦嶺のガイドがこのような状態になったら、今西錦司さんや今西寿雄さんは

どうするだろうか、かなり真剣な支援をするに違いない、これはわれわれ登山家のしなげなければならない義務だと私は考えた。

日本山岳会京都支部に支援会が結成され、京都の弁護士さんたちと相談をはじめ、また登山家たちに募金のお願いを始めた。

荻野ヤンボウは、登山家としての支援だけでなく、自然科学者としての現場での調査研究を志した。賛同して大日岳山頂の積雪・雪庇調査に、川田邦夫富山大教授、飯田肇立山カルデラ砂防博物館学芸課長、横山コータロー農研機構上席研究員、荻野ヤンボウ愛媛大・滋賀県立大名誉教授らが現地調査に向かい、それを支援して、計51名が、2005年4月17日～27日の間、大日岳に集中した。

その成果は、斎藤惇生編『北アルプス大日岳

の事故と事件』（ナカニシヤ出版2007年9月20日発行）にまとめられている。少し硬いけれど優れた書籍である。ためになる、勉強になる。

この間、私は何をしていたか。現地調査がきまってそれにそなえるため、ヤンボウと富山にスキー練習に行った。そこで杉山佐一さんの書いている大転倒を起こした。内脚回転か外脚回転の決定が遅れたのである。アッとおもった時、背中のみごとに雪面に叩きつけられていた。どんなに痛かったか！

そして調査期間中、ふもとの旅館で、固定電話と携帯電話を前に連絡係をつとめた。

これでもって、私のスキー山行の歴史は終わった。

’70年代のスキー山行

能田 成

ヤルンカン以降 AACK 京都在住メンバーでスキー登山が盛んにおこなわれた。その中心にいたのは岩坪ゴローさんや荻野ヤンボウさんであり、ラッセル部隊は甲斐（カイ）、森本グロン、横山コータロー等であった。先般カイがまとめてくれた山行記録（1974-1983）には43回のデータがある。平均するとこの10年間は年間4～5回は行ったことになる。スキー登山を安全に楽しむには登行専門ではなく、滑降技術の向上が必須であるという当然すぎる認識に至ったのは、カイ記録の3番目、75年2月の法恩寺であった。このときの悲惨とも珍百景ともいえる光景は昨年6月にゴローさんが8ミ리를編集し直したものを笹ヶ峰会員宛に送ってくれたので、ご覧になったことと思う。さてカイの山行記録にしばしば登場するオマエも一筆かけ、とのニューズレター編集長コータロー氏のご下命である。私にとって最も印象深い山行は78年剣一周であるが、それ以外の山行も書くようにとのこと。山行記録の野帳が行方不明になって久しいし、記憶も曖昧模糊としているが、敢えて一文を草する次第である。

湿雪降りしきる法恩寺での七転八倒の教訓から「雪質に関係なく直滑降一山廻り停止ができ

ることが山スキーの最低条件だ」と今にして思えば低すぎる目標を掲げて練習に励み、翌76年3月の石徹白高原の野伏ガ岳、薙刀山ではその成果を発揮できた。その前年の夏、岐阜山岳連盟による「ぎふ百山」が刊行された。その口絵写真の野伏・薙刀の姿をみて、ぜひスキーで登らねばと語り合ったことが思い出される。松峠まであがって実際に純白の優美な姿を見た時の感動は忘れがたい。当時はまだスキー場はできていなかったと思う。車を石徹白の村落に留め、和田山牧場にテントを張った。登山前夜にも拘わらずウィスキーを痛飲した。そのため翌日の登行を断念したものもいたが、他は颯爽とあるいは酒臭い汗を流しつつ野伏ガ岳の登頂に成功した。そして懲りることなくワインで祝杯をあげた。登行に時間がかかったため、頂上付近はすでにクラストしていて、小雪まじりの強風に滑降には緊張を強いられたが、無事テントへ帰着した時の喜びで再びボトルに手がのびた。明けて快晴の青空の下、我々のシュプールを目に焼き付けて、満ち足りた気分で下山の途についた。この山行の最長老は山口克さんであった。

その後の山スキーブームで野伏・薙刀の周辺には多くの人が訪れるところとなった。私達の

この山行はブームの極めて初期のものであった。そして山スキーのとりこになり、この翌年には10回もの記録がある。80年2月の部子山には多くの参加者があり、とても賑やかなテント村ができあがった。そのために翌朝、頂上を目指す隊列が発する酒の匂いに辟易した。部子山頂上付近は濃いガスで視界がきかず、最終目標の銀杏峰は断念した。テント地へ帰着するとメンバーが一名不足していることが判明して、あわてて回収にでかけた。ほどなく雪面に寝転がって降りしきる雪を愛でる風流人を発見し、ことなきを得た。全員がそろってふたたび酒盛りが始まった。この夜、井上ジローと私が靴を間違えて履き、ふたりとも一日中気が付かずに行動していたことに呆れたことも思い出の一つだ。井上は梅里雪山で不帰の客となった。私たちの靴を作ってくれたムラカミも亡くなって久しい。

10年にわたる山行のなかでも難易度、高度差などの点からみても特筆すべきは78年の剣一周であろう。私は自分の技術的にいたらぬ点をすこしでもカバーすべく、この山行のためにオガサカのGFショートという板を新調した。付け焼刃的トレーニングの効果は期待できないが、宝ヶ池の周りを走ったりもした。剣へは60年代末の冬に遭難が多発した時にザッカス大先輩のスキーを担いで馬場島まで行って以来だから、およそ10年ぶりである。剣沢のテント地までの記憶は曖昧だが、先発したカイとコータローが出迎えてくれたこと、いかに5月とはいえ、とても温かな日であったことが思い出される。彼らはこの日平蔵谷を滑降してきたとのこと。現役の時、グリセードでも緊張したのに、あそこをスキーで降るなんて。

翌日、剣沢から夏山合宿のテント地真砂沢へへて二股へくだり、ここでシールをつけて池の平小屋までの登りはスキーを履いたのか、引きずったのか記憶にない。池の平小屋へ登ると剣岩峰群の迫力に圧倒されて、こんなところでスキーをしてもよいのかと思うくらいであった。しかしそんな弱気な気分は小黑部谷へ飛び込むと消え去ってしまい、大回り、小回りを繰り返して1000メートルに近い標高差を一気に滑り降りた。大窓からの沢との出会いにテントを張り、私達が描いたシュプールを見上げたとき、達成感から胸が熱くなった。そしてこの夜はす

こし酒を飲んだ。夜中に小用に外へ出ると薄く霧のかかった夜空に星がにじんでいた。

翌日の気温も高く、クラストしていないのは有難かった。大窓のコルで靴ひもを締めなおし、装備を点検して大滑降にかかる。出だしはすこく急斜面だ。ここを滑るのか、と緊張はたかまる。同行の高田光政氏は「こういう場面でアルプスのガイドたちは堅実にシュテムクリスチャニアで降るものだ」と見本を見せてくれた。私達も彼の鮮やかなシュプールを追いかけたが、なにせ彼はほんもののアルプスのプロガイドである。すこしでもターンのきっかけが遅れると彼のシュプールからずれてしまう。負けてなるものか、前傾姿勢だ。スキー学校で習った「山腰、膝前」を念仏のように唱えながら滑る。谷は狭く行く手には大小の岩が行く手を阻んでいる。巨大な岩の間をすり抜けて急斜面の滑降では誰一人として転倒することもなく、かすり傷ひとつ負わずに無事終わった。緩斜面に入るとあとは馬場島までのんびりと滑るばかりであった。振り返って、大窓を仰ぎ見る。この高度差、急斜面を滑り切ったのだ。スキー登山でこんなにも達成感に浸れるなんて。大満足の山行であったが、帰りの車で大酒を飲んだという記憶がない。それとも富山の町でたっぷり祝杯をあげたのかもしれない。メンバーの最長老であった中島ダンナさんが「こんなに素晴らしいスキー山行ができて本当によかった。ありがとう。」と言われたことを今も鮮明に思い出す。山の自分史のなかでも特筆に値するものである。

およそ10年にわたる甲斐の山行記録は83年2月の関温泉―神奈山計画で終わっている。この年は2月までまったく降雪がなかったが、私たちが赤倉温泉へ集合する数日前から突然の大雪となり、予定の3日間も連日の猛吹雪のために登山は中止となり、やむなく酒びたりの日々を過ごした。我々世代のスキー登山の最終ページがこの山行とは言い難い記録で終わっているのは何かの皮肉なのか。今年は数年ぶりに冬らしい寒い日が続いている。だがもはやスキーを持ち出すこともなくなった。トレースの記憶にも霧がかかってきた。やがてすべては忘却の彼方へと消え去るかもしれない。けれどよき仲間との山行のことは折に触れて思いだしたいものだ。ボケを司る神様にもそれくらいの配慮はあってもよからう。

70年代スキー山行—おもに遠出の計画—

横山宏太郎

1. はじめに

甲斐さんが昔のスキー山行の記録をまとめてくれた。それを見ると、皆さんはたいへん頻繁に行っておられるのに比べて、自分はあまり参加していない。熱心に参加していたように記憶していたのに、意外だった。その主な理由は二つ考えられる。南極（14次越冬）から1974年に帰ってきて以来、ほぼ毎年ヒマラヤに出かけていたので、日本におらず、あるいは準備等に時間をとられ、参加できなかった場合があるだろう。また、大学院では宇治の防災研究所に通っていたので、首謀者たる岩坪さんの研究室に顔を出す頻度が低かったことも関係しているのかもしれない。

記録によると、奥美濃などの山行には不参加のことが多い。一方で、遠出する計画にはよく参加しているし、計画立案にも関わった記憶がある。

山行記録をそれほど丁寧につけた覚えがないのであまり期待せずに探してみたところ、幾つかの山行では記録が見つかった。そこで、それら遠出の計画を中心に、私の思い出を書くことにした。

2. 針ノ木岳（1978年3月15日～20日）

メンバー：岩坪五郎、荻野和彦、甲斐邦男、横山宏太郎

計画：扇沢—蓮華岳—針ノ木峠—針ノ木沢滑降—針ノ木西尾根—針ノ木岳—針ノ木雪渓（籠川）滑降—扇沢

3月15日 晴 扇沢出発（10：10）—丸石尾根標高2140m（15：00）

3月16日 曇、地吹雪 出発（07：00）—蓮華岳頂上（14：00）—針ノ木小屋（17：20）途中で1箇所ロープをfix。かなり寒く、—14℃。小屋の風上側を切ってブロックを積みテントを張る。

今日の行動でメンバーに疲れが見られるので、計画の日数では西尾根完登は無理と判断し、西尾根下部をトレースしたのち黒部ダムへ下山と計画を変更した。



写真1 針ノ木沢を滑る（横山）



写真2 黒部ダム湖畔にて、左から岩坪、荻野、横山

3月17日 曇り・晴 昨晚のうちに、テントのあたりでも20cmほどの新雪が積もった。雪崩の危険があるので停滞。何度も雪崩の音を聞く。

3月18日 朝は強風快晴、昼から天候悪化、雪降りだす。出発（7：00）—小南沢出合（10：00）—標高2100m小ピーク（15：00）

針ノ木沢を滑降する。小屋直下の急斜面はクラストしているので慎重に下る。途中で一度、沢が出ていてスキーを外した。小南沢出合まで、標高差1000m近い滑降だった。尾根に取りつ

いて最初の急斜面はスキーを引いて登る。そのあと、スキーをつけて登行。

3月19日 朝、雪。出発(8時すぎ)ー黒部ダム湖面(10:40)ーダム(時間不明)

天候悪く、下山することにした。林間滑降は快適。1974mの標高点を經由、西北西に向かう尾根沿いにしばらく下り、途中から北側の谷に入る。湖面に10時40分下り立つ。岩坪さん途中で立ち木に衝突してスキーが片方折れ、以後はかんじきで下る。

湖面には積雪が105cmあり、その下は氷。南極の海水(海にはった氷)の場合、ごく大雑把にいうと、数十cmの厚さがあれば雪上車が走れる。真水の氷は海水より強いので、4人の体重を支えるくらいの厚さはあるだろうと考え、主に湖面を歩いてダムに到着。誰もいないのでダムのトンネルの中で泊まる。

3月20日 ダム事務所のご好意で、車で送ってもらい下山。

計画は、針ノ木峠の両側で標高差1000mの大滑降を2本、というものだったが、残念ながら1本だけに終わった。

3. 剣一周(1978年5月2日～5日)

メンバー：先発：甲斐邦男、横山宏太郎

本隊：中島道郎、岩坪五郎、荻野和彦、能田 成、高田光政

計画：室堂經由三田平、剣沢を二股まで滑降、池の平小屋から小黒部谷を滑降、大窓谷出合から大窓、白萩川を滑降し馬場島。先発は一日早く出て剣岳登頂、平蔵谷滑降。

5月2日<先発> 弥陀ヶ原ホテル(08:45)



写真3 剣岳・平蔵谷を滑る(横山)



写真4 剣沢を滑る横山、甲斐



写真5 大窓へ登る途中で休憩

ー室堂(11:30)ー雷鳥沢(12:00-12:30)ー剣御前(14:20-15:00)ー三田平(15:30)

いまは4月中旬に室堂までの除雪が終わるが、このころは除雪の進み具合は遅く、弥陀ヶ原ホテルから歩き出す。御前から三田平へ滑る。テント泊。

5月3日<先発> 出発(07:00)ー前剣(08:50)ー平蔵の科尔(09:30)スキーをデポー剣岳頂上(10:10-10:40)ー平蔵の科尔(11:00-11:30)ー滑降開始ー剣沢出合(11:50-12:20)ー三田平(13:40)

天気よし。別山尾根から剣頂上を目指す。このころは剣岳を滑ろうというひとはほとんどいなかったのだろう。アイゼンを付け、スキーを引いて別山尾根を進む二人は奇異の眼で見られ



写真6 中仙人谷を滑る(横山)



写真7 白萩川を滑る

た。平蔵のコルにスキーをデポして、順調に頂上に立つ。平蔵のコルに戻ってスキーをつけ、滑降開始。平蔵谷の雪は、表面の数cmだけゆるんでおり、非常に快適な滑降だった。標高差約800m。

<本隊>天狗平(11:00)ー雷鳥沢(12:20-12:50)ー別山乗越(14:40-15:00)ー三田平(15:20) ここで先発・本隊合流し、以後は7人で行動する。

5月4日 三田平出発(10:10)ー二股(11:30-12:30)ー池の平小屋(14:30-14:50)ー大窓谷出合(15:20)

剣沢を滑る。二股から池の平小屋へ登る。小黒部谷に滑り込み、快適な滑降で大窓谷の出合に着く。

5月5日 出発(7:00)ー大窓(10:00-11:00)ー滑降開始ー池ノ谷出合(11:50)ー白萩側取り入れ口(12:15-12:45)ー馬場島(13:20)

大窓への登り、最後は雪庇がこちら側に張り出しており、ピッケルで切り崩して大窓に立つ。大窓からまっすぐ、白萩川・中仙人谷を下る。

雪の状態は問題ないが、雪面には兩岸からの落石が大小数多く見られ、あたらないように気をつけながら滑る。馬場島のすぐ近くまで滑ることができた。

天候に恵まれ、計画通りにことが進み、楽しい山行であった。

4. 飯豊山(1979年4月28日～5月2日)

メンバー：山口 克、岩坪五郎、岩坪吟子、橋本伊織、福嶋義宏、井上治郎、甲斐邦男、横山宏太郎

計画：山都駅(磐越西線)から入山、地藏山、飯豊本山、御西岳、大日岳往復、北股岳往復、梅花皮小屋のコルから石転ビ沢～梅花皮沢滑降、小国へ下山

下りは雪がどこまであるかによるが、標高差1000mの大滑降を期待した。

残念ながら天候が悪く、3日間停滞し、途中から撤退となった。

下りの斜面は快適な滑降だったが、滑り終え



写真8 飯豊・三国岳にて、前列左から福嶋、山口、橋本、後列左から甲斐、井上、岩坪吟子、岩坪五郎



写真9 三国岳から下山にかかる

てから林道に出るためにかなり厳しいアルバイトとなった。

手元には記録がなかったので、以下、岩坪吟子さんの「百山のしおり」から記述を引用させていただくことにする(一部略、句読点等変更)。
4月28日 地藏山(1485.2m) 三角点は雪の下で確認できず。おだやかな陽の光、雪上のひるごはん。テント設営。夕食：生肉の刺身、テキ肉、野菜スープ。 夜半より雨。

4月29日、30日 吹雪の沈殿、テントも飛びそうな風、ときどきスキー練習、夜は歌。
タルタルステーキ、しいたけ、ねぎのコンソメスープ、夕食後のクミン(パキスタンの匂い)、色んなチーズ、コニャック。

5月2日 三国岳(1644m) 狭い尾根、凍っていて滑り落ちそう。眼がくらみそう。どんより曇ってさびしい。からすとうぐいす。大日岳と飯豊本山が見える。また来る日もあろう。撤退、スキーで下る。下り道とぎれスキーかついで150m直登、藪にひっかかりつつ下る。男のスポーツはかくあるものか。くだればふきのとう、山桜、水ばしょう、こぶし、たむしば、いわかがみ、まんさく。

5. おわりに

この機会に、断片的な思い出も少し書いておきたいが、私の記憶によるので、間違いもありうる。記録を持っている方が、それは正しくはこんなことであった、と書いてくださればありがたい。

AACKでは、「紀元節山行」と称して、2月11日の休日を利用してスキー山行を何度か計画、実施した。本来の紀元節の意味とはもちろん全く関係はない。

そのひとつは、「赤倉スキー場から妙高山(時期不明)」である。スキー場の最上部から前山(外輪山)に登り、当時は廃屋だった大谷ヒュッテでテント泊した(いまはりっぱな避難小屋が

建っている)。翌日、ほぼ夏道とおなじルートで妙高山登頂。スキーは頂上直下の岩場でデポした。往路を逆にたどり下山した。滑りの爽快感は記憶にあるものの手元には記録が見当たらず、甲斐さんの表にもものっていないが、写真は見つかっている。

「関温泉・神奈山ツアー(1983年2月)」の計画では、大阪から京都経由で赤倉に向かう夜行スキーバスを利用した。私と妻は西宮に住んでいたのが大阪から、他のメンバーは京都から乗車した。実は京都に着くころにはもう遅れが始まっていた。楽しく酒を飲んで寝て起きたら到着、のはずだったが、道路は大渋滞で、なんと翌日の昼頃にまだ松本のあたりをのろのろ進んでおり、だれかが追加の酒を買い出しに走ったのではなかったか。夜になってようやく関温泉についた。翌日、ツアーに出る皆さんを見送り、私は妻とふたりで高田の実家に向かった。ツアーは大雪のため途中撤退となった。

いま思えば、背伸びした計画もあったのではないか。いまとは異なり、詳しい気象情報や積雪情報など簡単には得られない時代であった。うまくいった山行もあるし、悪条件で途中撤退したこともある。それでも、これらのスキー山行で大きな事故がなかったのは、皆さんの登山経験に加え、スキー技術の向上によるところも大であろう。ともかく、いまでも楽しく振り返ることができるのは、ほんとうに幸いなことである。

注

写真は横山の手元にあったもので、撮影者の特定は難しいが、おそらく荻野さん、甲斐さん、横山の撮影であろうと思われる。

文献

岩坪吟子(2021)百山のしおり 私家版

吉野熙道さん追悼 (2022年2月10日逝去)

脱皮し続けた男

栗田靖之

吉野熙道コッペとは、1960年入部の同回生であった。お父さんは法務省の官僚で、官舎は皇居の田安門の内側にあった。1回生の間では、コッペは皇居に住んでいたらしいという噂であった。一度、その東京の家にお邪魔した覚えがある。2人の妹さんが居て、お父さんから、われわれ学生が口にしたこともないウイスキーをご馳走になったことを覚えている。

1回生の冬は、笹ヶ峰のヒュッテでのスキー合宿であり、中島ダンナさんがスキー・コーチで、はじめてスキーを履いた新人も、一応山スキーが出来るように訓練を受けた。最後の仕上げは、戸隠山北東斜面を中腹までスキーで登り、帰りにスキーで斜面を滑降して下った。まずダンナさんが先頭でトラバースして、1回生がワン・アット・ア・タイムでそれに続いた。吉野コッペが斜面を滑り出した。しかしどうしたことか、コッペは斜面で転倒した。その時、ダンナさんは「危ない」と声を上げた。斜面の下は沢だっただろうと思う。コッペはやっとのことで起き上がり無事にその斜面を滑り降りた。その時ダンナさんが、「山登りでは、転げてよい場所といけない場所がある。あの斜面は転げてはいけない場所だ」と言った。われわれ1回生は、この言葉を山登りの鉄則として心に刻み込んだ。コッペの失策が1回生に教えてくれた教訓であった。

コッペはいろいろな趣味を持っていた。そのひとつとして、彼は自転車が大好きであった。彼は自転車にのって京都の町を走り回っていた。ある暑い夏の日、コッペは金閣寺まで自転車で行って全身汗まみれで帰ってきた。私の家に来て、水を浴びさせてくれと風呂場に駆け込んだ。そして腹が減ったと言って、途中で買ってきたインスタントラーメンと卵を料理した。彼はインスタントラーメンの中に、卵を7つ割り込んでそれをうまそうに食べた。彼のコッペというあだ名は、笹ヶ峰ヒュッテで小屋番をしていた

時、コッペパンを30個食べたことに由来している。彼のすることは、このように並外れていた。

3回生になって、コッペは京大山岳部を率いるリーダーになった。山岳部では、先鋭的な山登りをやっていた。山岳部での活動は、彼自身が、「AACK ニュースレター」に5回にわたって書いている（「AACK ニュースレター」Nos. 59, 60, 61, 63, 64）。今から思えば、あれは自分の人生を振り返った自叙伝であったと思う。彼の国内山行で輝かしい山行記録は、1962年、1965年の剣沢大滝の登攀であろう。この時の記録は、「AACK ニュースレター」No 61に詳しく報告されているのでここでは繰り返さない。1968年5月の連休を利用して吉野コッペをリーダーとして、杉山スリコ、安岡ヤスと私で内蔵ノ助平、黒部別山から剣沢大滝を往復した。その時に見た大滝の威容に圧倒されたことが、今でも記憶によみがえってくる。

彼は、1964年樋口ジャンさんが隊長を務めるガネッシュ遠征隊に参加し、7256メートルの登頂に成功した。1969年には、松尾稔さんが隊長を務めたブータン遠征隊に参加した。この当時、彼は農学部を卒業して、ある製薬会社に就職していたが、この会社を退職した。またこの隊に参加する直前には、付き合っていた京子さんと結婚した。その時の媒酌人は樋口ジャンさんであった。この隊は初めてブータンを西から東まで横断旅行をした。それだけにとどまらず、吉野コッペと山本テンガイはブータンに1年間滞在して、日本とブータンの交換学生の第一号になる計画であった。2人は1か月の滞在は許されたものの、それ以上の滞在許可が出ずブータンから帰ってきた。それは彼らの問題ではなく、日本とブータンが親密な関係になることをインドが好ましく思わず、インド高等弁務官からの圧力でブータン滞在が許されなかったらしい。

ブータンから帰国して木原生物学研究所に就職し、コムギ交配の作業に没頭した。その後、岡山大学に移籍した。

1972年、AACKが長年申請していたヤルン・カン（8505メートル）の登山許可があり、その隊長は樋口ジャンさんであった（のちに隊長は西堀榮三郎、樋口は登攀隊長）。コッペは岡山大学に就職して4か月しかたっていないが、1973年のヤルン・カン遠征隊に参加した。岡山大学の教授は大反対であったという。ヤルン・カンは松田ランプと上田ポッポが初登頂したが、その下山の途中で松田ランプを失った。

ヤルン・カンの遠征の後、コッペは本格的な山登りをやめて、突然、彼の興味は海に向かった。この時の心情を、もう山にやり残したことはない、と自叙伝の中に書いている。

コッペは最新の知識を詰め込んだ理想のヨットを建造する計画をたてた。3000万円の資金が必要であり、そこで彼はテントの世界的メーカーの能村龍太郎さんにスポンサーをお願いすることにした。「太陽テント」にそのお願いに行くとき、そのヨットに乗り込む予定の今田福成さんが、日ごろの自分を見てもらうためにボロボロのジーンズで行こうとしたという。彼は、「それは絶対にダメだ。スーツを着てこい」と説得した。コッペは心情的には、その気持ちを理解していただろう。しかし彼は京大山岳部やAACKでの遠征隊で、民間の企業に募金をお願いに行った経験があった。製薬会社で苦労した経験も加わって、彼はそのような自己アピールは世間では通じないということを知っていたのであろう。

このヨットは「太陽」と名づけられ、1981年6月、サンフランシスコ湾を出発点として、淡路島洲本をゴールとするレースで、43日と15時間の記録で2位のヨットに31時間38分の差をつけて優勝した。彼はこのヨットを引き取り小豆島に家を買って係留していた。一度、ヨットの話聞いたことがある。興味深かったのは、ヨットマンは自分のワッチの時間が過ぎると完全に休憩に入り、次のワッチをしている人の仕事を助けようとするのではない、と話してくれた。彼はその点が山登りのチームワークと一番違う点だと話していた。

彼は、ある人のヨットを回送したとき、奄美大島の沖で海難事故に遭い、スリランカ人の船長が乗る4万トンの大型貨物船に救助されてい

る。この海難事故が岡山大学に知れて、教授との関係がうまく行かなくなったようである。岡山大学に籍を置いたまま、京大に通って彼はサトイモの研究に没頭し、1994年には京都大学博士（農学）の学位を取得した。そして1995年、岡山大学が結んだ国際交流協定で中国雲南省昆明市にある研究所に赴任している。

コッペは酒が好きであった。それが原因かどうかは分からないが、2005年咽頭癌を患っていることが分かった。ある日、電話が掛ってきて、俺は近いうちに咽頭を摘出する、これが肉声で話をする最後の機会かもしれない、ということであった。私はそれを聞いてビックリした。そこまで悪くなっていたのかという思いであった。しかし実際は、それから1年ほど彼の咽頭摘出手術は先延ばしされ、それ以降も何度も電話で話をした。

2006年、彼は岡山大学を定年退職した。それと同時に、中国科学院昆明植物研究所に赴任した。昆明に行くとき、彼は保有していたヨットを係留権も付けて、ヨット好きの友人に上げてしまった。彼は2010年9月、滞在していた雲南から帰国した。

不幸にも愛妻・京子さんに先立たれ、病気に侵された彼は息子と娘さんに見守られながら、岡山の施設で生活するようになった。同回生の安岡ヤスや堀内コンゴと、ガネッシュ隊で同じ仲間であった木村や上田ポッポとで、年に一度は、岡山で彼を交えて会食をした。彼はその会食を大変喜んでくれたようである。その時にはもう声を失っていたが、会食の後では葉書を送ってきてくれた。その葉書には、こんな病気になって不自由な生活を強いられることが分かっていたら、若い時に好きなことを、無茶苦茶してでももっとやっておけばよかった、と書いてあった。それを読んで、コッペよ、君は山に向かい、海に向かい、サトイモに向かい、そのエネルギーを十分に爆発させてきたやないか、と言いたかった。

コッペはその生き方の中で何度も殻をやぶって脱皮していた。確かに彼は小さな転倒をしたかもしれない。しかし致命傷ではなかった。彼は出来上がった世界に安住している自分に我慢ができなかったのかも知れない。コッペは探検と冒険に自らをさらすことで、自分の命の躍動を感じていたのであろう。

コッペさんはやさしかった

田中昌二郎

コッペさんの本名は吉野熙道（ひろみち）である。「康熙帝の熙だ！」と言って威張っていた。コッペさんは怖いリーダーだった。ストイックな言動、ルームの机の上で1分間に50～60回腹筋運動を繰り返す姿などにも恐れを抱いて、下級生である我々は”鬼のコッペ”と呼んで少し距離をおいていたが、彼が三回生の秋に同行した「黒部別山沢偵察行」は未だに印象深い。

コッペさんは剣大滝の次に、当時未開拓であった黒部別山沢と大タテガビンの登攀に意欲的で偵察行を計画していたが、各自の秋山プランがあってメンバーが集まらなかったようだった。そこで私と能田にお声がかかり、お互い岩派でないので少し尻込みしながらも黒部の秋も魅力的なので、偵察ならと参加したように思う。リーダーは勿論コッペさんで、小原さん、能田と田中の4人だった。扇沢から種池へ上がり岩小屋沢岳西尾根を辿って、黒部別山沢右股と左俣、大タテガビンの壁を真正面から眺めて下廊下へ降りるという計画であった。

登りの行程は全く記憶に残っていない。岩小屋沢岳西尾根を下って樹林帯にテント泊。小雨が夜半から雪になって10センチほど積もったため翌日は沈殿。コッペさんは雪が止むのを待って辺りを歩き回り、キクラゲを沢山採取してきてくれて、愛想のないラーメンもうまく感じたことを憶えている。翌日はようやく晴れた。黒部別山沢、大タテガビンの岩壁はすっかり雪を被っていた。朝日が射しだすとその雪が融けだしてあちこちに滝が架かり、特に黒々とした別山沢左俣の岩壁に真っ白な斜めの滝がかかって壮観だった。十字峡へ下る尾根と別れて黒部別山沢の落ち口対岸へ向かって尾根を下った。その先の核心部は、ただただコッペリーダーの後について下ったのみで記憶がない。

『京大山岳部報告 No.11』の時間記録を見ると、黒部川右岸の岩壁、『アカヌケの上のガラ場をトラバースし、20mのアップザイレンの後、テント設営泊』。翌日は、『岩のナイフリッ

ジから上流へトラバース、のちルンゼを下り最後5, 6mはザイルを使う。本流（11:55）』とある。今改めて2.5万分の1地形図「十字峡」を開いて見ると、尾根の末端は岩マークが何重にも重なり合っていて、こんな急峻な岩尾根の、しかも複雑な地形を安全に下降できたものと、コッペさんのルートファインディングの確かさに感嘆するとともに、よく危うい後輩を安全にリードしていただいたと今更ながら感謝の念で一杯だ。

ガネッシュ初登頂、ヤルン・カンでの活躍は周知のことだが、卒業後では、神戸三宮での結婚式と岡山コッペさん宅のことを思い出す。

媒酌人はガネッシュ隊長の樋口ジャンさん夫妻、モーニングを着て照れくさそうなコッペさんと、黒留袖姿の新婦のゆったりと堂々とした姿が好対照で、間違いなく絶好のカップルだった。またガネッシュ組の旅行で、下津井から岡山・吉備津神社を訪ねてコッペさん宅を訪問した時、奥さんから、「この食卓にひいたガラスが割れているのは、わざと残してあるのです」と紹介された。一時は「仏のコッペ」とも言われていたが、やっぱり時折起こす痲癩に対する戒めのために残されていたのだそうだ。やっぱり「鬼のコッペ」も健在だったのだ。その後、昆明赴任のおりも奥さんも同行されて、外国での生活を楽しんでおられると聞いていたが、病を得られて早く亡くなられたことは本当に悔やまれてならない。

コッペさんの病との闘いは大変なものだったと聞いている。不屈の強い気持ちで立ち向かっておられて病氣も「鬼のコッペ」には通じないのと違うかと話していたが、遂に訃報を聞くこととなってしまった。大所帯の山岳部のリーダーとして部員をまとめ、時に厳しく、時にやさしく我々をリードし、自身の山の夢を果たした上に、曲折を経ながらも研究の道を捨てずに進まれたコッペさんは、やっぱり立派なリーダーだった。本当にありがとうございました。安らかにお眠りください。合掌

稀有なるクライマー吉野コッペさんを偲ぶ

木村雅昭

吉野コッペさんは剣大滝の初遡行、錫杖岳の未踏の岩壁の登攀に挑戦される等、京大山岳部屈指のクライマーであったが、しかし怖かった。私が3回生の5月、前年の11月山行で穂高の稜線から滝谷に転落した我々の同回生加納洋君の遺体捜索のために5月の滝谷に入ったことである。彼が落ちたと思われる滝谷C沢右俣の氷が張り詰めた急峻なルンゼを、コッペさんをリーダーに登っていた際、彼の同回生安岡さんがアイゼンバンドがゆるんで立往生していたところへ「なにをしとるか」と大声の叱声飛んできたのにはびっくりした。このようなコッペさんを日頃敬して遠ざけていたが、しかし1964年ガネッシュ遠征隊で思いがけず一緒になったときには緊張した。モンスーン明けを待ってポカラを出発し9月にベースキャンプを張った後登攀にかかったが登攀に際して彼が発揮した力はさすがであった。上尾副隊長の命令で私が最終の第五キャンプ上の偵察に出かけてオーバーハング気味の氷壁にでくわした際、アブミを使っての吊り上げで突破を試みたものの、最後のところでもたついていると「膝がまがとる」との叱声で正気に戻り首尾よく乗り越えることができたのは彼のおかげである。この後、安堵の煙草をふかしていた私を尻目にコッペさんはその先に広がる氷交じりの堅雪の急斜面に丁寧にステップを刻んでいったが、このステップは翌日の頂上アタックに多大の助けとなったものである。

このような次第でその翌日の第一次頂上アタックとなったが彼の寝起きの悪さに悩まされたことを今でも鮮明に覚えている。私など上田ポッポの「起きる」の言葉に飛び起きたが、コッペさんは何やらぐずぐずつぶやきながらシュラフの中からすぐには出てこなかった。朝食を済ませてテントの外に出ると長い用たしとなり、時間の経つのにやきもきした。このときアンナプルナⅡ峰の後ろから太陽が顔を出し、テント場にも朝の光がまばゆく差し始め、焦燥感が高まった。ようやく彼が歩いてきて、「待たせたな、いざ出発だ」との一言で勇躍頂上を目指して出

発することとなったのである。

アタック隊はコッペさんと上田ポッポ、それに私の3名が、アンザイレンしてトップを代わりつつ急な雪面を登っていき、昼前に頂上稜線直下に到達した。上を眺めると雪壁に覆いかぶさるように雪庇が張り出していてこれを登りきるには絶妙なバランスが必要である。このときコッペさんにトップが回ってきたことを私は天に感謝した。

はたして彼はわたし達が見まもるなか、ステップを切りつつ急な雪面を雪庇の下まで登っていきそこでピッケルを振るって雪庇の裏側の氷交じりの雪を掻き分け、絶妙なバランスで雪庇を突破し稜線の向こう側へと姿を消してゆくこととなったのである。それはポッポによれば「ヨガのコッペ」の面目躍如たらしめる技である。

その後はザイルに頼って私たちも雪庇を突破した後、これまでとは違って変わって歩きやすい頂上稜線を登ってゆき、無事ガネッシュ中央峰に登頂することとなり、その翌々日には上尾副隊長とシェルパのミンマ・ツェリンにより同じルートを辿ってさらに南の最高峰に登頂された。

このようにしてガネッシュ初登頂がなしとげられたが、その後、学生隊員は二手に分れて、それぞれネパールの徒歩旅行に出発した。私に割り当てられた相棒はコッペさんである。あの寝起きが悪く、怖いコッペさんかと思うといささか気がめいだったが、いざ旅行が始まってみると、怖くないばかりか私が困っているときなど、優しく助けて頂いた。これでは「鬼のコッペ」でなくて「仏のコッペ」である。しかし現地人に対しては怖かった。我々はカトマンズからポカラまでダコタ機で飛び、そこで待っていたシェルパのカルマと共に重い荷物を背に中部ネパールの旅に出発した。遠征隊の時にはベースキャンプまで荷物はポーターに担がせたから快適に歩けたが今度は少し歩くだけで汗びっしょりで重荷が肩にくいこんでくるし、村の入り口で激しく吠えかかって来る牧羊犬も恐ろしい。このときコッペさんはピッケルを突き出して「黙れ」と一喝したがその怒声に犬ではなく

私がたじろぎ、心配もした。それは飼い犬に対するふるまいに怒った村人から報復されないかと思ったからであるがコッペさんは平気で私の注意を聞き流している。こうした心配をいだきつつわれわれは旅を続けたが幸いなにごとも起りしなかつた。

私たちの目的は当時未踏であったダウラギリ連峰への登攀路を見つけ出すことである。まずカリガンダキを北上して、河口慧海も逗留したツクチュに着き、そこを拠点に巨大なダウラギリ山塊の東側面を、5千メートルまで登って行ってテントを張り、その後あたりに散らばる牛糞を集め、それに火をつけて沸かしたチベット茶でツァンパをねって腹ごしらえをし、吹きすさぶ寒風を吸って胸の痛みを覚えつつ、数日あたりをくまなく徘徊し、時に双眼鏡も使って登路を探索したがしかし登路はみあたらない。そればかりか私は、高所服とシュラフに沁みついた牛糞の匂いに悩まされて不眠となり、さらにチベット茶とツァンパも喉を通らず、いつしかやる気が失せてきた。他方コッペさんはといえば毎晩よく眠り、チベット茶とツァンパを美味そうに食べている。これでは自分は探検に向きではないかとショックであったが、しかしさしあたっては登攀路の探索である。結局、北面で深追いすることを避け、これまで人が殆ど入っていなかったダウラギリ連峰の南面に切り替え、もと来た道を引き返してカリガンダキを南下したものの、かつて通った道であるから退屈である。たまには乏しい共同会計からひねり出した金で、村人から鶏を買い、料理して気分転換をはかったが気分が晴れずいつしか二人の間に隙間風が吹き始め、朝食を済ますや別々に荷物をもって出かけ夕食まで互いに声を掛け合うこともなく歩き続けるといったことがしばしば起こるようになってきた。幸いベニという小さな町でカリガンダキは西に曲がってマヤンディコーラに入ったから、我々は気を取り直してマヤンディコーラを遡行して行ける所迄行き、ダウラギリ連峰の南面からの登攀路を探すこととなったのである。

マヤンディコーラはその両岸が切り立った岩壁で、人跡も稀で村落も貧しく地の果ての村さながらであったものの、登攀路を探しつつマヤンディコーラを北上し、清水が湧き出たとある広場に到達した。そこは樹々がまばらに生えた



写真 ガネッシュを登攀中の吉野さん(1964年10月)。後ろにシェルバのカルマとミンマが続く。

草原で、寒風が吹きすさんでいた北面の高地と異なって温暖な気候で桃源郷のような所である。この地にテントを張って拠点とし、登攀路の探索にかかることになった。北面ではチベット文化圏で行動していたからチベット茶とツァンパであったのに対し、インド文化圏に属する南面は鶏肉とコメのご飯であって私はうれしかったので勇躍2人してくまなくあたりを探索し、とある谷筋の奥に氷河とおぼしき氷雪を見届けて遂に登攀路を発見したと思ったが、しかしこの氷河へのルートに岩壁が立ちはだかつており、これではこの谷筋を通っての大規模遠征隊の登攀は困難と判断した。

毎晩カボチャスープと飯盒メシという粗食と重荷に耐えながらここまで来たのに成果はこれまでかと落胆し、その腹いせにとっておきの鶏肉でささやかな晩餐会を催した時のことである。鶏肉を焼いて存分に食べ、麓の村で仕入れたロキシーを飲んでいると、暗がりの奥から気味の悪い獣の遠吠え声が聞こえてきた。コッペさんによればこれは狼かもしれないということである。これは大変と二人して周りの木々を集めて大きな焚火をして大声を張り上げて歌を歌って威嚇した後、テントの入口にピッケルを立て、シュラフの横に鉈を置き、もしも襲ってきたならお互い戦うまでと覚悟を決めたら不思議と心が落ち着き眠ってしまった。幸い無事に朝を迎えることとなったが、しかし、帰路立ち寄ったカトマンズの博物館に展示されていた狼の剥製は精悍そうで大きく、襲われていたなら生還し得たか否か分からない。それはともかく中部ネパールをこのように広く踏査したにもか

かわらず、ダウラギリ連峰への登攀路を発見することができなかったことは残念であった。私たちの後、南側からダウラギリ連峰への登攀を試みたオーストリア隊が全員行方不明になったというニュースに、日本に帰って接して驚いたが、はたして彼らがとったルートが我々が登攀が困難と判断したルートであったかどうか分からない。

その後はブータン探検に出かけたコッペさんを尻目に私は大学院でくすぶっていたもののヒマラヤへの思いは断ちがたく研究対象としてインド研究を選んでインドに頻繁にでかけたが、ヤルン・カン遠征のときには、大学にがんじがらめで登山の様子は転送されてきたトランシーバーの交信でしか知り得なかった。しかし最終キャンプから登頂にかけてのコッペさんの活躍は彼ならではのものである。

このコッペさんが癌を患われたのは今から20年程前のことである。癌は咽頭部から食道に転移し手術ということになった。この一回目の手術で癌はなくなったがしかしその後再発し、再度手術となったばかりか何度も手術と再発をくりかえすこととなったのである。この間彼はめげることなく、奥様と一緒に中国に渡航し、数年にわたって彼本来の遺伝学の分野で日中共同プロジェクトを立ち上げる等、日中間の学术交流に甚大な貢献をされた。またこの間多忙な合間を縫って拙宅にもおこしいただき、私と山のこと、学問のことなど互いにビールを手

に夜遅くまで語り合う一方で、私の3人の子供にも親しく接していただき深い愛情を注いでいただいた。しかし度重なる手術に耐え、気丈に病と向き合ってこられたにもかかわらず癌は一向によくならない。加えてこれまで心尽くしの看病をしてこられた奥様がひと足先に他界されるに伴い、自然と外出の機会が減り、ベッドに伏せる日が多くなってきた。心配して栗田さんをはじめ彼の同回生、上田ポッポと共に岡山に彼を見舞ったが、声帯を切除した彼との会話は筆談であった。しかし彼は意気軒昂で頭脳明晰、彼との会話はヒマラヤから遺伝学と広範囲に及んで時のたつのも忘れたもののコロナが拡大して面会謝絶となり、長期間会うことができなかった。この間、どうしておられるかと心配したが、コロナが峠を越し、面会謝絶が解除されたなら真っ先に病床にかけつけようと思って気を紛らわせていた。

このコッペさんの訃報に接したのは、面会謝絶が解除される気配が見え、積もる話をしたいと思っていた矢先のことである。斎藤ドクターによれば20年の長きにわたってコッペさんが癌を持ちこたえたのは彼の身体が抗がん剤にマッチしていたことに加えて彼が自分の癌に傲然と対峙したからである。それは古武士さながらの振る舞いであったが、いますこしコッペさんと語りあいたかった。コッペさん色々ありがとうございました。今はやすらかにお眠り下さい。

吉野コッペさんとの60年

上田 豊

1. 国内の山で

京大山岳部にわたしが入部した1962年には、現役学生部員が初めて主体となった京大のヒマラヤ登山隊が、10月13日、インドラサンの初登頂に成功した。その10月から3回生だった吉野熙道（コッペ）さんが部のリーダーになるが、11月26日、2回生の加納洋さんが穂高の滝谷に滑落。搜索が重ねられ、翌年5月29日になって遺体が発見された。

この年は初登頂と遭難という、山岳部にとって対照的な明と暗が重なった。遠征隊を出した負担が遭難につながったのでは？との議論も起

こった。事故原因や搜索計画の検討で、リーダーのコッペさんの深く考えつめる顔を見つづけることになった。

コッペさんと合宿以外の国内山行で一緒だったのは、1963年11月下旬の北鎌尾根だけだった。かれは4回生、わたしが2回生のときだ。尾根上のテントでラジオから、アメリカのJ.F.ケネディ大統領暗殺のニュースが流れた。

この時は、翌年に未踏のヒマラヤ7千メートル峰の登山が実現するとは、思いもよらなかった。さらに、北鎌尾根でルート工作に励んでいた3回生の神山さんと共に、10年後にはコッ

ぺさんと未踏の8千メートル峰に向かうなんて、夢にも思わなかった。

2. ガネッシュで

11月に北鎌尾根を登っていた頃、コッペさんはネパールへの個人的なトレッキングを画策していたが、実現の見通しは立っていなかった。だがそれを種火にして輪を広げ、1964年のアンナプルナ南峰（別名ガネッシュ）の初登頂をめざす現役学生主体の山岳部隊へと結実させていく。

初登頂は成功し、その後4人の学生隊員は2手に分かれ、ヒマラヤ山域で探索の旅をした。帰国後、それらの記録を4人で分担執筆し、『ガネッシュの蒼い氷』（朝日新聞社、1966）を出版した。

この本でコッペさんは、京大山岳部の日頃の活動や、そこから隊が結成され日本出発にこぎつけるまでの動きを執筆した。参加が決定した隊員たちの紹介文で、自身の事を次のように書いている。「通称コッペ（ある時突然、気持ちがよいようにコッペパンを食いたい、とわめき出したそうな）。こわい、こわいといわれ“鬼のコッペ”などという者がいるが、当人は“仏のコッペ”とうそぶいている。」

この本でわたしは、日本出発から登山の一部始終までを書いた。その中で、登攀中のテントで交わされる4人の学生のうちとけた会話を弦楽四重奏になぞらえて、次のように表現した。「まず島田と木村（4回生）のバイオリン・コンピが話をきりだし、話題をひろげてリードしてゆく。ぼく（3回生）のビオラはひかえめで、遅れて話ののっていく。チェロの吉野（5回生）はどっしりと口数も少ないが、話のあいまあいまに賛否を明らかにし、一座の空気に大きな影響力をもつ。」

ガネッシュの最高峰は10月15日、上尾副隊長らによって登頂された。その道を開いたのは、中央峰に登頂した13日の吉野・木村・上田による第一次頂上アタックだった。長い氷雪斜面の急登、大雪庇の乗越し、感激の頂稜登行。帰路は三日月の光のもと、緊張の連続だった。登攀全体の山場となったこの日、コッペさんの凜とした姿が頼もしく、カッコよかった。

3. ヤルン・カンで

1973年、未踏峰では当時最も高かったヤルン・カンへの京大学士山岳会（AACK）隊の派



写真1 1964年10月13日、ガネッシュ中央峰頂上の吉野さん。正面はアンナプルナI峰（本誌93号2020年5月掲載の、ダウラギリを背景にした中央峰の登頂写真と同じく、彼は頂上でカメラに顔を向けようとはしなかった）

遣が実現する。ガネッシュ隊からは、その隊長だった樋口明生さんが登攀隊長となり、吉野・上田が参加した。

ふところの深いカンチェンジュンガ山塊への長いアプローチと、急峻な氷雪の登攀ルートが待っていた。輸送・荷上げの人力不足、高山病、連日の地吹雪などで、登山の進行は遅れていた。京都で登攀計画を立てたのは、わたしだった。だが現場に来て、年長の富田さんとコッペさんが、日々の行動で疲れているなか、局面の変化に応じて複雑な荷上げ計画を練り直してくれた。

こうして、松田隆雄さんとわたしが頂上アタックに出るところまでこぎつけた。その前夜、アタック・キャンプにはサポート要員としてコッペさんが居た。拙著『残照のヤルン・カン』（中央公論社、1979、1991）で、ガネッシュ登頂後、二人でベース・キャンプから遠出をした時のことを思い起して、わたしは次のように書いている。

「帰路、その滝の下りはこわかった。すでに下っていた吉野は、わたしのすぐ下にもどってきて、わたしの足を足場にみちびき、手で支えてくれた。まさに、初心者と教師ぐらいのひらきがあっ



写真2 2008年5月5日、ガネッシュ隊の集まりで。左から、吉野京子・熙道、上尾庄一郎、田中昌二郎、樋口敦子・美和子、木村雅昭、島田喜代男、上田慶子の皆さん

た。現役時代、鬼のコッペとよばれていた彼も、結婚し、子供もでき、ツノがひっこんだかにみえていた。だが、登山にかかっただけから、昔のコッペがよみがえっていた。その彼が、この頂上アタックでは、後輩にあたる松田とわたしのサポート役を精一杯つとめてくれている。頭のさがるおもいである。』

5月14日、登頂はできたが、帰路で不時露営。翌日の夜、わたしは救援隊と合流できたが、松田さんの姿は消えていた。

隊の正式報告書『ヤルン・カン』（朝日新聞社、1975）は、大判で分厚い大著である。その編集と本文の執筆をコッペさんは一手に引き受け、精力的にやりとげた。次いで隊の学術調査報告書も編集した。素晴らしいスケッチの数々で、拙著の章毎の扉も飾ってくれた。

かれに付きまとう“鬼のコッペ”像には、自身の先鋭的な先導者としてのイメージがある。一方、ヤルン・カン登攀の終盤では、荷上げ計画作成や頂上アタックのサポートで貢献し、帰国後は報告書などの形で成果を後に残した。そのような、背後で支える役割に徹した姿勢を思うと、かれ自身がうそぶいていた“仏のコッペ”像をも、かれらしい流儀で具現していたように思えてくる。

4. “闘うコッペ” 2004～2011年

ヤルン・カン隊は、2023年には登頂50周年をむかえようとしている。だが不幸がつづき、皆で再会する機会がないまま、西堀栄三郎隊長ら15人だったメンバーは、ついに5人だけに

なってしまった。ガネッシュ隊の方は、時々集まって酒盛りを楽しんできた。だが樋口隊長は、1983年に亡くなられている。

コッペさんの入院を知ったのは2005年2月、かれと同期の阪本さんからの電話だった。翌月、岡山医療センターへお見舞いに行った。咽喉と食道の抗がん治療を受けていた。前年12月にノドの異常を感じてのことだった。その前、11月には、京子夫人とのかねてからの約束を果たし、ボカラからガネッシュを見てきたばかりだった。

経過次第では、手術で声帯を失うことになるかもしれない。来春には、岡山大を定年退職して昆明の植物研究所に赴任が決まっていた。後日もらった葉書には、もし声帯を取らずに済んだら、どうやって講義をサボレルか？ 研究中とあった。5月に知人たちに送られた退院報告では、病状・治療経過が詳しく説明されていた。その追伸で、抗がん剤の投入期間外は、病院周辺の丘陵を時速8～10キロで毎朝1～1.5時間、歩いていたと書いてあった。

2008年5月には、ガネッシュ隊の小宴を兵庫県の拙宅で開いた。樋口隊長夫人もお嬢さんと来てくださった。コッペご夫妻はヨークシャーテリア犬同伴で、拙宅で一泊された。翌日、わたしら夫婦と4人・愛犬1匹で近くのダム湖畔へ山菜採りに出かけた。ウグイスがさえずる心地よい晴天のもと、草花に詳しいコッペさんと、ほがらかな京子さんとのひと時は、楽しい思い出になった。

2010年3月に、京大山岳部の在籍経験者か

らなる笹ヶ峰会のメール・グループに、昆明から近況が届いている。中国科学院との客員教授の契約は終わったが、頼まれた仕事もあって、岡山へ治療で時々帰りながら、昆明滞在をつづけていた。病気は小康状態で医師が驚いていることや、入院中を除き、毎日ワイン1,2本かビール3,4本を飲んでいることも、しっかり書きそえてあった。

2011年には、AACKのホームページに相いで、下記の寄稿をしている。

- ・4月「Bhutan Sketch 1969-1970」
- ・5月「Yalung Kang Sketch 1973」
- ・12月「京大山岳部と劔沢大滝」

(AACKホームページにある「おしらせ」のコーナーを開き、過去の記事へたどっていくと見つかる。)

5. “闘うコッペ” 2012～2022年

2012年6月、コッペさんは食道がんの手術で、ついに声帯を失うことになる。そして、C型肝炎の治療ミスのため闘病を余儀なくされていた京子さんが、9月28日に亡くなられた。

その頃のAACKニュースレターには、コッペさんによる「私の京大山岳部」(全5回)が連載中だったが、原稿の方は書き上げていた。内容は山岳部の事に留まらず、自叙伝ともいえるものだ。特に活動を外洋ヨットに転じてからの話は、初めて知る圧巻の世界だった。この原稿を書くきっかけには、京子さんの言葉があった。それを知ったのは、彼女の訃報を受け、コッペさんに送ったおくやみのメールへの返信からだった。

京子さんはいつも言っていたようだ。「あなたは自分のしたいことを全部してこられたし、他の人の何倍も楽しんできたのだから、お世話になったりご迷惑をかけた人たちへの恩返しに、一生の記録を書いて出版しないとイケないのよ。」コッペさんもその通りだと思って、そのための下書きの一部として書き出したという。「今後は出版の原稿を書き上げるのと、また少し絵を描くことで、京子の気持ちに伝えていくつもり」とのことだった。

だがその後、コッペさんは体調をくずした。やや回復した2013年2月、ガネッシュ隊の木村さんと、岡山のお宅を訪ねた。この時は久しぶりだったが、焼酎の牛乳割りを飲みながら、ニコリともしなかった。だが、木村さんが次々

とくりだす話題に乗ってきて、筆談で応じる会話は気がつけば4時間を越えていた。

その後コッペさんは健康回復に努め、その年の末頃には完全に酒を断った。かれは声が出せず、メールも使わなくなっていたので、ご息の建さんが、状況の報告や訪問の世話などをしてくださっていた。

2014年11月、ガネッシュ登頂50周年を記念したAACKニュースレター71号が発行された。それにコッペさんは、「ガネッシュのあとに」と題したおもしろい長文の記事を載せた。それを見て元気そうなので、建さんを通して会えないかたずねた。だが、気を使っているのか、来てくれという返事はもらえなかった。

2016年4月になって、コッペさんから会いたいとの葉書が木村さんに届いた。早速コッペさんと同期の栗田・安岡さんらと一緒に、岡山へ向かう。駅西口の全日空ホテル20階にある和食レストランで個室の食卓を囲み、アルコール抜きの昼膳をとった。3年ぶりのコッペさんは、前回会った時とは別人のようにさわやかで、豊かな表情から笑い「声」さえこぼれた時もあった。わたしたちは、幸せな気持ちに満たされた。

その後2017年12月と2019年5月、前回の面々にコッペさんと同期の堀内さんが加わり、前回と同じパターンで会った。会食後も毎回、ホテル横の喫茶店に移って楽しい時を過ごした。コッペさんに変わりはなく、むしろ同期のお仲間の方の健康がどうかと思えた。

コッペさんにわたしたちが会えたのは、この2019年5月15日が最後となった。その日は偶然なのだが、ヤルン・カンで46年前に逝った松田さんの命日だった。

この年もらった年賀状で、コッペさんはこう書いている。「・・・本を読むことだけが楽しみという、おどろくべき老後を送っています。仏のコッペであった功德であろうと、ほくそ笑んでおります。」

その後はコロナ禍のため、会うことができないまま月日が流れた。そして2022年2月10日逝去の報せが、吉野建さんから届いた。

建さんからの訃報には、コッペさんの最後の1年ほどの様子が詳しく書かれていた。去年の前半に中咽頭がん再発の兆しがあり、かれは抗がん剤投与の再開を選択して闘いつづける姿勢を示した。不運にも6月に大腿骨を骨折して手

術し、8月まで入院。その間、抗がん剤治療は中断され、がんは拡大。9月に加療を再開するも、10月に緩和ケアに移行した。

12月3日に迎えた81才の誕生日は、建さん宅でお孫さんたちに囲まれて祝った。最後は、静かに穏やかに息を引きとられたようだ。

コッペさんの一代記

前田 司

私が山岳部に入部した時のリーダーが吉野コッペさんであった。水曜会でコッペさんはパンの神様と同じ格好でいつも窓辺に腰掛け、サブリーダーの水瀬サウドさんがドスの効いた関東弁で議事を仕切っていた。

新学期の水曜会では、昨秋滝谷で起こった加納さんの滑落事故の遺体捜索が主な議題であった。状況を何にも知らぬ新入生は先輩の議論をながめるだけ。リーダーの心の重荷なんぞ知る由も無い。捜索隊が何度も編成される中でも、新入生の5月山や金毘羅の岩登り訓練は実施された。

あるとき、一年先輩の筒井タツポンさんが、「コッペさんはな、低血圧やさかい、朝起きる時のご機嫌が悪いのや。そやさかいコッペさんと山へ行ったら朝起こす時はな、初めは“コッペさん、コッペさん”と小さい声で、それからだんだん声を大きくすんのかや」と心得を教えてくださいました。ところが残念なことにその後コッペさんとパーティを組む機会がなかった。しかしコッペさんが現役最後の6回生の春山に3回生の小生と2回生2人、1回生2人で毛勝山から北方稜線を通って剣へ大日尾根から下山と23日の山行を計画した。ルートは厳しいが我が部のパイオニアの山行としてはちと物足りない。強いて挙げればこの難ルートを3回生と2回生が中心となって行動することがいくらか斬新であった。初めはこれだけのメンバーで計画を出したが水曜会では力量不足として認めてもらえない。そこでコッペさんをリーダーに計画を立て直して水曜会でやっと承認してもらった。荷物の軽量化を図った食料の買い出しも終え出発まであと2日となった時、コッペさんがルームに来て「卒業が危ないので山いけへんねん」と関東訛りの京都弁で謝った。製薬会社の就職も決まっており、何としても卒業せねばならぬ状況に下級生は頷くほかはない。コッペさんを欠いての北方稜線は諦めねばならない。急

遽3回生の小生をリーダーにして大日尾根から剣へ、早月尾根を下る計画変更を臨時水曜会で認めてもらった。気持ちの整理のため10日ずらして出発。そのため季節外れの強烈な冬型のドカ雪に閉じ込められたりしたが、無事計画を遂行できた。しかし荒天の中で雨も混じっており剣の岩壁はツルツルの氷。ところがこれに挑む小生のアイゼンのツアックはズボラして研いでこなかったのだからと氷を捕まえられない。用心して多い目に張ったフィックス・ロープに助けをもらい無事登頂できたものの、こんなアイゼンで北方稜線に行っていたらたちまち滑落していただろう。考えてみるとコッペさんは私の命の恩人であったわけだ。

その後京都を離れられたコッペさんとはあまりお会いすることもなかった。

2007年11月発行のAACK ニュースレター43号から編集を田中ショウチンさんの甘言に乗せられて小生が引き受けることになった。不肖の編集人にとっては毎号の原稿を集めるだけで精一杯。それでもなんとか5年務めた時、コッペさんから京大山岳部だった頃の思い出話を書いてみたいがどうかとの問い合わせがあった。何回かに分けて書いてみるとのこと。有難い、これで原稿集めの心配がいくらか楽になる。もちろん大歓迎ですと即答した。おそらくコッペさんの山岳部での活動を主軸にした人生は読者の皆さんの登山人生と重なるところが多々あるのではとの思いからである。

早速第1回の原稿が届く。なんと原稿用紙40枚以上の量。計算してみると9ページになる。法人の公式刊行物に個人の一代記に多くの紙面を割くのは如何なものかと考えたが、著者は「AACKの諸兄の発表された記録や文章はそのほとんどが客観的記述を旨として個人的背景、主観的記述が少なすぎる」「自分の中にある当時の山岳部の雰囲気や残像を発表しておこ



写真 夫婦でガネッシュと（2004年11月）「いつか、わしが登ったヒマラヤを見せてあげる」と結婚する前に約束していた

う」との趣旨に賛同して、割愛することなく掲載することにした（59～61, 63, 64号に掲載）。その後毎号締め切りに遅れることなく原稿が届けられた。3回、4回と筆の勢いはますます冴えて12、3ページと膨れてきたがどの回もコッペさんの山に対するストイックなまでの行動にひきこまれてしまった。初めは幼少期から山岳部入部へと山に対する気持ちの変化を、そして京大山岳部の活動を下界の生活とともに余すことなく記述された。第3回の剣大滝への山行はコッペさんの山岳部時代の執念の記録である。第4回にはブータンへの入国の困難に挑む苦勞

を、そしてヤルン・カンへの取り組みが裏話を交えて淡々と語られている。

最終回では山と全く離れた海洋ヨットへの転向がまるでドキュメント映画のようにスリルに満ちて書かれている。そして最後にコッペさんが初登頂したガネッシュをバックに奥様との記念写真を掲載して感謝の言葉を添えて一代記を閉じられた。

コッペさんはこの執筆当時、食道がんとの戦いの最中であつた。さらに最愛の奥様まで亡くされたところであつた。最後の2回の校正はご自宅でなく療養の施設へ送ることとなった。その最終回はご息様が手伝われたようであつた。コッペさんがこの一代記をもって人生を閉じられようとしておられるのかと心が騒いだ。しかしその後も昆明に出掛けられたとの報を聞き、まるで不死鳥のような人だと驚いていた。

この冬コッペさんの訃報に接し、思ったことは「コッペさん、コッペさん」と小さい声で起こす機会がついになかったことである。

コッペさん、もう起こしませんのでゆっくりお休みください。 合掌。

*コッペさんの一代記「私の京大山岳部1960年代を中心に」は、AACK ホームページのニュースレターのバックナンバーでご覧いただけます。

農生の先輩コッペさん

斎藤清明

吉野さんは農学部農林生物学科（農生）の同じ研究室（実験遺伝学講座）の先輩になるのですが、私が入部したてのころは、5回生「鬼のコッペ」の印象が強いです。スマートな自転車でルームにやって来て、窓枠に腰を掛け、鋭い視線を投げかけてくる。そんな姿が目には焼き付いています。孤高の岳人のおもえました。

2回生の冬山（北岳バットレス～塩見岳）が、吉野リーダー（6回生）とのただ一度の雪山でした。この山行は、コッペ、ランプ、サンペイ、OBスリコの上級生4人と、ハブ、モスラ、私の2回生3人の間には3学年分以上の差がありました。私はバットレスに手を触れるまでに

は至らず、技量のなさを憐れんでくれました。それでも、元旦には北岳ピークを踏ませてもらい、その後の塩見岳への縦走を楽しむことができました。

やがて、山から海に転じて、外洋ヨットレースに打ち込んでおられたころ、新聞記者として取材しました。太平洋シングルハンド・レースを、「太陽」で世界最短記録で優勝させた、みごとなマネージメントに目を見張ったものです。山にも海にも、すごい人だともおもいました。

岡山大を退職されて中国科学院昆明植物研究所に行かれる前に、福嶋ビーバーさんや私が勤める京都の総合地球環境学研究所にやって来ら

れ、「お前らも調査で雲南に来ることもあるだろう。一緒にやろう」といわれました。コッペさんの後半生は、サトイモ研究に打ち込まれてきたのを認識したのです。

改めてコッペさんの「サトイモ～進化の一断面と根栽農耕における位置」(吉田ほか編『イモとヒト』平凡社、2003年)を読み、その研究の苦勞をしのびました。そのなかで、サトイモとの出会いとして、「探検大学として名高い

京都大学に行き、山岳部に入っていつかヒマラヤに行こう。植物が好きだから農学部にしよう」という動機を記されていました。そうか、鬼のコッペさんも私もおなじようなおもいで入ったのかと、仏のような先輩におもえてきたのです。

編集人注：ランプ＝松田隆雄、サンペイ＝山本武久、スリコ＝杉山隆彦、ハブ＝土生昶毅、モスラ＝高野共平

「平井一正先生を偲ぶ会」出席報告

上尾庄一郎

「平井一正先生を偲ぶ会」にAACKを代表して出席したことを報告します。本来は岩坪五郎氏が出席される予定だったのですが骨折の回復具合からドクターストップがかかり、急遽小生が代理出席することになりました。

偲ぶ会は神戸大学山岳会(会長 山田 健氏)主催でもっと早い開催が予定されていたのがコロナ禍のため延期を余儀なくされ、漸く4月23日11時から開催されました。会場は神戸市中央区中山手通 ラッセホールで、神戸大学山岳会関係者以外にも、廣瀬由仁子様、甲南大学山岳会、日本山岳会近畿支部などからも参加者がおり、平井ポコさんの交流関係の広さと人望を感じさせられました。

式は、黙禱 追悼のことば 主催者挨拶 献杯 映像による回顧 のち参加者からの思い出披露と進みました。

私はスピーチを指名されて、今まで6年も先輩の平井さんをポコさんとはしか呼んだことがなく、これはAACKでは皆そうしていることから話をはじめ、60年前共に参加したサルトリカリス遠征では貨物船でカラチまで行き、カラチからラワルピンディまでは隊員の中の二人だけで隊の荷物を送る2台のトラックの助手席に一人ずつ分乗して行ったこと、また40年前のAACKとして最初のチベット高原の未踏峰への遠征の対象の山として、すでに1983年以後の登山許可を神戸大学が取得しているのを承知の上で1982年のカンペンチン登山許可申請する事を平井さんに了承していただき、お陰で登山許可を取得して成立した遠征隊では副隊長を

務め、大人数による初登頂にも成功したのですが、平井さんに対する引け目の感情を持ち続けていたこと。平井さんは1986年に長年の粘り強い交渉の結果、クーラカンリ登山と東チベット高原での学術調査の許可を取得され、自ら総隊長としてクーラカンリ初登頂と学術調査の成功を達成された事により、ようやく引け目の感情から解放されホッとしたのを思い出しますと話しました。なにしろクーラカンリはカンペンチンに比べればはるかに有名な山で、高度も300メートルほども高いのですから。晩年の平井さんとは斎藤惇生医師の斎藤診療所でしばしば会いましたが、コロナ禍の最中にあのように突然亡くなるとは思ってもいかなかったうえに、安らかとは思えない最後であったことは、残念でなりませんと言って話を終わりました。

スピーチされた神戸大学山岳会関係者以外には平林克敏氏(日本山岳会、同志社山岳会)もおられました。私は知らなかったのですが、平井さんは京都市の周囲の低山を登るグループに顧問格として参加されて、特に例会後の会食を楽しんでおられたとのことでした。たくさんの方々の思い出話があり、参加者全員(40数人)の記念写真撮影の後散会となりました。

偲ぶ会は終始平井さんに対する尊敬と感謝の念に溢れておりました。会場では大部の神戸大学山岳会、山岳部会報「山と人」22号が配られました。その中の第一部 追悼 には平井一正先生の項目があり多数の方々の追悼文が掲載されていますが、本会からは岩坪五郎氏が「ゴローのポコ追悼文」を寄せておられます。

退出時には廣瀬由仁子様と主催者からお礼の品（かりんとう）を頂きました。

編集人注

当日の集合写真が神戸大学山岳会のウェブサ

イトに掲載されています。あわせてご覧ください。

https://www.acku.net/acku_net_news_2022/Memorial-Hirai.jpg

第 54 回雲南懇話会（京都フォーラム）講演概要（その 1）

山岸久雄

2021年12月18日（土）、京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールで第54回雲南懇話会が開催されました。その開催に至る経緯、当日の状況について本ニュースレター第100号で速報的に紹介しましたが、今回は講演概要（その1）として、3つの講演についてご紹介します。

「雲南懇話会の概況と1989年当時の梅里雪山山麓（ス農村、明永村）」

安仁屋政武

（雲南懇話会代表、筑波大学名誉教授）

京都フォーラムの最初の講演として、雲南懇話会の安仁屋代表は懇話会の発足経緯と、これまでの活動概要を以下のように語った。

1991年1月、京都大学学士山岳会（AACK）による日中合同梅里雪山第2次学術登山隊はキャンプ地を突如襲った大雪崩により全隊員（日本人11名、中国人6名）が行方不明となる大遭難に見舞われた。その7年後の1998年より、明永氷河下部から同登山隊員の遺体や遺品が発見され始めた。AACKの小林尚礼会員は明永村の村民の協力を得て、長年にわたり献身的に遺体・遺品の捜索活動を続けてきた。これを見守る関東在住のAACK会員の中に、日本国内での雲南地域への関心を高め、この捜索活動を精神的に支援する活動を興そうではないかとの機運が高まり、2004年12月にAACK会員有志により雲南懇話会が発足した。翌2005年3月に東京神田の学士会館で第1回の懇話会（講演会）が開催され、以後、年3～4回のペースで懇話会が開催されてきた。

毎回の講演者は4～5人で、学識経験者、その道のエキスパート、登山家、旅行家、趣味愛好家など多方面に人材を求め、これまでの講

演者数はのべ243人に達した。講演の対象地域は雲南を中心とする東アジアが主体だが、アフリカ、南米、南極・北極も含まれる。話題は登山・トレッキング・秘境の旅行、雲南の文化を中心とするが、時にはトピックスとして先端の学術成果をわかりやすく解説したものも含み、講演内容は多岐にわたっている。毎回プログラムを構成するにあたり、山が関係する話題と学術的な話題がバランスよく配置されるよう心がけ、ユニークな講演会になるよう努めてきた。

会の運営には京大山岳部関係者のほか、趣旨に賛同する様々な背景の方々が参加している。運営経費は懇話会に参加する人が支払う参加費が中心であるが、その後、共催組織から助成金をいただけるようになった。会場はAACK会員の協力により、市ヶ谷のJICA国際会議場を可能な限り利用させていただいている。

雲南懇話会はホームページ（www.yunnan-k.jp）を持ち、講演要旨の紹介、関連サイトへのリンクなど、詳細な活動報告を行っている。これに加え、年間講演の中から講演者の協力を得て4～5編の報告・論文を京都大学のフィールド科学研究組織が年1回発行する「ヒマラヤ学誌」に投稿するなど、学術活動にも貢献している。さらに以上のような座学の他に、現地を訪れるフィールドワークを企画しており、現在までに雲南を中心に、ネパール、タイなど15回のフィールドワークを実施してきた。

雲南懇話会では発足15周年となる2020年5月に、今まで支援いただいた関係者への感謝の気持ちを込め、記念となる講演会（京都フォーラム）を会のルーツのある京都大学で開催する計画を立てた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言が発出されたため、2回の中止・延期を経て、ようやく今日の

開催を迎えることができた。

本講演の後半では、安仁屋さんが日中合同梅里雪山第1次学術登山隊（1988-1989年）の学術隊員として、1989年10月～11月に山麓の斯農（Sinong）村、明永（Mingyong）村に滞在し、梅里雪山の2つの氷河（斯農氷河、明永氷河）と周辺の氷河地形調査を行った時の様子を、当時撮影した写真をもとに紹介した。両村はチベット族が住む村であり、数百年前から続く伝統的な生活が営まれていた。当時、村にカメラを持っている人はおらず、この時、学術隊が撮影した写真は村の伝統的な生活様式や姿を記録した貴重な映像資料となった。

斯農村は瀾滄江右岸の河岸段丘上にあり、段々畑の段に沿って様々な果樹が植えられ、とても美しい村であった。53世帯の村は「上村」と「下村」に別れ、学術隊のベースハウスは車道が通る「下村」北部の大きなハーブ園に設けられた。同隊には歯科医が2人おり、村に診療所を開いた。最初にやってきたのは好奇心旺盛な子供達だったが、時が経つにつれ地元はもちろん、近隣の村からも大勢の人が1日ばかりで診療にやってくるようになり、診療所は住民達の交流の場となった。

同隊が斯農村を訪れたのはトウモロコシの収穫時期にあたり、様々な農作業を観察することができた。滞在中には村祭りが開かれ、学術隊員も招待された。また、村で行われた結婚式の見物が許され、貴重な写真を撮ることができた。これらの詳しい様子は雲南懇話会ホームページの「第54回」「安仁屋政武講演」の項に掲載されているので参照されたい。

明永村は明永氷河から流れ出る明永川右岸の河岸段丘上にあり、とても美しい村である。瀾滄江との合流点付近は急斜面の峡谷であるため、1989年当時車道は無く、明永村には徒歩でしか入れなかった。安仁屋さんは10月下旬の4日間、明永氷河の地形調査のため案内人を伴い、食料とテントを馬に載せ、斯農村から峠を越えて明永村を訪れた。当時、この辺り（大理以北）は外国人立入禁止区域であり、特別の許可が必要であった。さらに6月に起きた天安門事件の影響もあり、外国人の行動は厳しく監視されていた。そのためテントは目立たないよう、村より上流側の、道から外れた大きな岩陰に張った。しかし、監視されていたためテント

の所在はすぐに知られたようで、当時珍しかった日本人を見ようと、テントの周りには老若男女数人が朝夕陣取り、安仁屋さんが炊事のためテントから顔を出すたびに、指さし囁かして、大笑いした。まるで動物園の猿になったような心境であったとのこと。

ベースハウスと安全確認の無線交信を行うため、テント地でアンテナを立てていると、狩から帰る村民が通りかかり手伝ってくれた。彼は安仁屋さんが明永村で唯一接触した村民であった。2014年、明永氷河での遺品捜索に長年協力してくれた明永村村長のチャシさんが、AACKの招待で来日した際、チャシさんにこの話をしたら、「それは自分だ。手伝ったことは良く覚えている」と言い、お互いに驚いた。

安仁屋さんは2005年に再度、明永村を訪れ、その変貌ぶりに驚いた。舗装道路が村まで開通し、村の中心部まで車で入れる。太子雪山寺には馬で行け、そこには宿泊設備があり、巨大な鉄製の回廊が氷河見晴台まで続いている。この回廊は2002年に建設されたが、翌2003年には、この地が世界自然遺産に指定された。このような大規模な観光用人工施設のあるところが世界自然遺産に指定されたことに驚いた。同地はその後、2009年に国立公園にも指定された。梅里雪山はカイラスと並ぶチベット仏教の聖山であり、観光地としても人気が高く、今後ますます観光地化が進むであろう。明永村をグーグル画像で見ると、畑の大部分は健在で農業は維持されているようだが、観光客相手の仕事が増え、村民の生活も大きく変わったであろう。

安仁屋さんは明永村の道路沿いの宿泊施設、土産物屋など、観光開発が進んだ場所の2005年時点の写真と1989年当時の写真を並べて映写し、いかに変化したかを示した。変化は村だけではなく、自然の姿にも見られた。太子雪山寺近くから1989年と2005年に撮影した明永氷河を見比べると、16年間で氷瀑の位置は大きく後退し、氷瀑下流の氷河の表面高度が低下していることがよく分る。地球温暖化の一つの現れであろう。

講演の最後に、梅里雪山の頂上から南東へ延びる尾根を、似たアングルで異なる年（1989年、1990年、2005年）に撮影した3枚組の写真が示された。1990年の写真は遺品として回収されたカメラに写っていた貴重な写真である。尾

根上の氷河が下部の氷壁につながる部分に注目すると、1990年の写真では氷河の下部が切れ落ちていたが、1989年では滑らかな急斜面となっている。2005年では切れ落ちた痕跡は残っているが、その下の尾根の形状がかなり変わっている。この比較から、ここの氷河の状態は頻繁に変化していることが窺える。多分ここどこかが崩れて大規模な雪崩が発生し、第2次登山隊を襲ったのではないかと安仁屋さんは推論を述べ、講演を締めくくった。

「パミール・天山 7000m の峰々からヒマラヤの高峰へ」

近藤 和美（登山家、高峰ガイド、
日本勤労者山岳連盟名誉会員、
前日本山岳・スポーツクライミング協会
国際委員、Snow Leopard award 受賞者）

近藤さんの雲南懇話会での講演は2017年4月、同年12月に続き、3回目となる。今回は、近藤さんが登山家となる経緯と、高峰登山家に育ててくれたソ連領(当時)中央アジアのパミール・天山での登山について詳しく語り、最後に数々のヒマラヤ・カラコルム 8000m 峰登山の様子を豊富なスライドで紹介された。

近藤さんは1941年11月、名古屋市に生まれ、現在80歳である。1959年、17歳で上京し印刷会社に就職した。当時、若者の余暇活動はあまり無く、仕事仲間に奥武蔵に誘われた最初の登山は苦しかったが、すぐに自分は登山に向いていることがわかり、のめり込んでいった。岩登りの適性にも目覚め、谷川岳・一倉沢、北岳バットレス、穂高滝谷・奥又白等を登り、並行して冬山にも登るようになった。長い休暇がとれない勤労者だったため、アプローチの短い後立山を中心に活動し、鹿島槍北壁・荒沢奥壁、不帰東面、越後荒沢山東面などでいくつかの冬季初登攀を行った。中でも冬の鹿島槍荒沢尾根～五龍岳は今でも記憶に残る会心の登山であったと語った。

1972年、所属していた日本勤労者山岳連盟(労山)はボーイング707をまるごと1機チャーターし、ヨーロッパアルプスを登る企画を立て、30歳となった近藤さんはこれに参加した。初めての海外登山であった。登山期間は3週間あり、シャモニー針峰群などを登り、日本国内で

培った登山技術が海外の山で通用することを確認した。最後の数日を利用して自信をもってマッターホルン北壁に挑み、完登した。

1976年、東京のクライマー仲間ではヒマラヤに行こうという機運が盛り上がった。しかし、ネパールやパキスタンでは登山許可取得には日本山岳協会(日山協)からの推薦が必要だった。当時、日山協は加盟団体以外には推薦を出していなかった。そこで、そのような登山制限がないインドヒマラヤに向かうことにし、ナンダデビ山群のマイクトリ(6803m)とデヴトリ(6788m)を目標とした。現地では登山隊を2班に分け、両班は山群の左右から同時に登山を始め、両峰の間の鞍部ですれ違う交差縦走に成功した。これはヒマラヤ史上初の交差縦走であった。

その後、さらなる高峰を目指していたところ、ソ連スポーツ委員会登山部門が主催するパミール国際キャンプを知った。パミール山群はネパールやパキスタンと比べ割安な費用で登れること、登山許可などの難しい手続きが不要なこと、各山群のベースキャンプ間の移動にヘリコプターを利用できること、キャラバンが不要な分、短い日数で登山できること等の利点があり、欧米、日本から大勢の登山者が参入した。

登山の対象となるパミール山群は中央アジア～南アジアの高峰を連ねる大山脈が集まる結び目(ノット)となっていて、パミールノットとも呼ばれる。レーニン峰北方のアチクタシが登山の根拠地となり、ここへは道路が通じている。また、アチクタシから目的とする各山群のベースキャンプまでヘリコプターで移動できた。ただ、ソ連解体後、パミール山域はタジキスタンとキルギス、天山はキルギスとカザフスタンという三つの国に分かれたため、現在は国境を越えるヘリコプター移動が難しくなっている。

近藤さんは1984年、42歳の時に初めてパミール国際キャンプに参加し、パミールの最高峰であるコムニズム峰(当時の呼称。現在はタジク民族開祖の英雄にちなんだイスモイル・ソモニと改称、7495m)、コルジェネフスカヤ峰(7105m)、レーニン峰(7134m)の登頂を目指したが、天候や隊員の体調を勘案し、コムニズム峰は断念し、残る2峰を登頂した。レーニン峰は山容がおだやかで、世界で最も登り易い7000m峰といえる。

1986年にもパミール国際キャンプに参加し、

宿願のコムニズム峰に登頂したほか、コルジェネフスカヤ峰、レーニン峰にも登頂した。

1989年には天山山脈も西側（共産圏以外）の登山家に解禁され、対象となる山域が広がった。解禁を受け、近藤さんは同年、天山山脈を訪れ、ハン・テングリ（7010m）に日本人として初の登頂を行った。これらの登頂により、ソ連山岳連盟より「雪豹登山家」の称号（Snow Leopard Award）を得た。1991年には天山山脈最高峰のポベータ峰（7439m）にも登頂し、これでソ連領の7000m峰全5座（イスモイル・ソモニ峰、レーニン峰、コルジェネフスカヤ峰、ハン・テングリ、ポベータ峰）を完登した。ソ連はこの年の末に解体されたので、近藤さんは西側登山家として最初にして最後の5座完登の雪豹登山家となった。

近藤さんはこの両山域で1984年から1996年にかけて計7回登山したが、この間に、氷河が衰退してゆく様子を実感した。特に日射量の多い南向き斜面では、かつて雪で覆われていたところが氷の露出した斜面になり、以前は簡単に登れたのに、今は格段に難しくなったという事例を体験した。これは後年、10年余の間を空けて再訪したヒマラヤのいくつかの巨峰でも体感しており、地球温暖化の影響であろう。なお、天山・ポベータの緯度は北海道南部と同じくらいであるが、ヒマラヤ・エベレストの緯度は奄美・徳之島くらいである。この緯度差により、標高が7000m台半ばどまりであるパミール・天山の方がネパール・ヒマラヤよりもはるかに氷河が発達していることを実感するという。

これらパミール・天山での登山について、近藤さんは日本勤労者山岳連盟の機関紙「登山時報」2019年1月号～2020年3月号に「NO LIMIT 限りなき山行 —中央アジアの高峰—」という連載記事を執筆している。そこでは近藤さんが撮影した迫力ある写真を見ることができる。雲南懇話会では同連盟の許可を得て、この連載記事を雲南懇話会ホームページの「第54回」、「近藤和美講演」の項に掲載しているので参照されたい。

1992年、近藤さんは50歳にして初めてヒマラヤの8000m峰、チョーオユーに挑戦した。登山中、雪崩に埋められ九死に一生を得たが、その1週間後に無酸素登頂を果たすことができた。本講演ではヒマラヤ8000m峰登山中の写

真が、近藤さんが登った順に次々と映写された。ダウラギリ、ローツェ、チョモルンマ（エベレスト）、ナンガパルバット、マナスル、シシヤパンマ、カンチュンジュンガ、マカルー、アンナプルナ等々。最後は2019年11月、78歳で登頂した峻峰アマダブラムの写真であった。講演時間の制約で、詳しい説明を聞く時間がとれなかったのは残念であったが、登っている高所現場でなければ見られない迫力ある写真の数々を堪能することができた。

近藤さんの膨大な海外登山リストは上記の雲南懇話会ホームページに掲載されているので参照されたい。その年表によれば、近藤さんは1992年以降の26年間に22回、8000m峰に挑んでいる。最初のチョーオユーを除き全てで隊長を務め、「登らせる」側であったことに誇りを持っている。自身も8000m峰9座に、延べ10回登頂し（内、6回は無酸素登頂）、9座目のローツェ登頂は2011年、69歳の時であった。8000m峰9座登頂は、山田昇、名塚秀二、田辺治（いずれも故人）と共に、全14座達成の竹内洋岳に次ぐ日本人第2位である。また、2003年、61歳の時のガッシャーブルム2峰は8000m峰無酸素登頂の日本人最高齢記録で、現在まで更新されていない。

近藤さんはこれらヒマラヤ登山で多くの成果を挙げることができたが、これは40歳代に足しげく通ったパミール・天山でのセミアルパインスタイルによる高峰登山の経験が下地となった賜物であると語っている。近藤さんは青壮年期には第一線級クライマーを自負していたが、今ではピークハンターが自分の本質なのかなと思ったりするそうである。これだけの登山を可能にした日常トレーニングについて尋ねられることがあるが、特別なことはしていないそうで、ただ毎週のように実際の山に登っていることが自ずとトレーニングになっており、継続が力になっていると語った。中学生の頃から、ふくらはぎがとて太く、脚力があり、もともと登山に向いた体であったようだ。

近藤さんは標高6000m以上の山に83回登っており、高所滞在時間は日本人としては断然多い。航空パイロットは滞空時間で、その経験と技量を示すものだが、この長い滞高所時間が、本来高い心肺能力も相俟って、高い高所順応能力や無酸素登頂を可能にしているのではなから

うか。高齢になった最近の登り方について尋ねると、若い頃は垂直指向であったが、最近では45°指向と言うことにしているようだ。80歳を超えた今後、指向角度はさらに下がるかもしれないが、お元気に登山を続けられることをお祈りする。

近藤さんは1977～1984年に日本勤労者山岳連盟発行の「山と仲間」誌の編集に携わり、1985～1992年はフリーランスとして『山岳年鑑』などの編集に携ったが、1987年以降は徐々に登山ガイド、特に高峰登山リーダー、ガイド業に軸足を移した。

著書・編著書として『魅惑の氷壁』『山一生きる・学ぶ・探る』『冬山』『谷川岳・苗場山・武尊山』など。

「茶を育てて見えてくること—雲南省（徳宏州）南見村と島根県柿木村から—」

上原美奈子（Tea literacy）

茶道家である上原さんは、「チャ」そのものの学びを求め、当時住んでいた神奈川県で茶園を借り、栽培に携わっていたが、東日本大震災の際に茶園はセシウムで汚染されてしまう。上原さんは除染活動を経て、茶栽培から茶の湯まで茶を all-round に学ぶ道場「夢見る茶畑」を創設した。その活動の中で、「肥料をやらない茶はまずい」という茶業界の通念に疑問を抱き、「それでは昔の茶はどうだったのか？」と考えるようになった。上原さんが雲南懇話会と出会ったのはこの頃であった。2011年10月～11月に行われた雲南へのフィールドワークに参加し、樹齢800年の茶の樹を訪ねたり、茶を祖先とする創世神話を持つトアン族の民俗博物館を訪ねたり、現地の方々と茶文化交流を行った。以来、上原さんは茶を通じ、雲南懇話会との関わりを深めてきた。雲南懇話会では茶文化探究は一つの重要な柱であり、これまで多くの講演が行われてきた（文末の講演一覧参照）。上原さんは本講演前半で、これらの講演のレビューを行ったが、その詳細は雲南懇話会ホームページ、「第54回」「上原美奈子講演」の項を参照されたい。

上原さんは茶道家として、また茶農家として茶の声を聴きたいと願い、現在は島根県の西南端にある吉賀町という過疎の町に移住し、茶栽培と茶文化継承の活動を行っている。吉賀町は

住民の約半数が65歳以上の高齢社会であるが、住民は80歳を過ぎてもよく働き、女性の平均寿命は日本一である。本講演後半では、上原さんが吉賀町で学んだ茶づくりと、茶の故郷である雲南の茶づくりとの対比、後継者育成などについて、以下のように語った。

日本のお茶は現在、蒸して作る製法が一般的だが、吉賀町では釜で炒った自家用茶を作る家庭が多い。そこで使われる茶葉は茶畑から収穫したものではなく、裏山、畑の畔、庭の隅などに生えている、肥培管理されていない茶葉である。最近の研究によれば、お茶はコロナウイルスの非活性化に最も有効なエピガロカテキンガレートを含む唯一の食品であり、中でも釜炒り茶はそれを一番多く含有することである（奈良県立医科大学「お茶による新型コロナウイルスの不活化効果について」、ochahp.pdf (naramed-u.ac.jp)）。このような優れた効果を持ち、日本人の歴史に寄り添うように続いてきた茶づくりであるが、現代では過剰な農薬と化学肥料に見舞われ、その効果も霊性も、それまでの茶とは異なる茶になってきているように上原さんは感じている。また、日本の茶づくりでは全国的に後継者が少なく、その知恵と技術の伝承が難しくなっている。

一方、雲南懇話会のフィールドワークで訪れた雲南省徳宏州南見村では、各家庭は山で茶葉を摘み、釜炒り茶を作っている。この地域では後継者問題はなく、逆に、他地域からの参入者もあるほど将来は明るいという。その理由は、中国では地域性のある茶に人気があり、バイヤーが高値で買い取りに来るからだそうである。

日中両国の茶づくりに見るこの違いは、日本の村の閉鎖性、若者の農業離れと一言で語られることが多いが、実際に過疎の村に住んでみると、農業を志向する若者は多く、それを受け入れる地域も柔軟であることがわかった。日本では地方で農業に就労することを目指す若者に補助金を与え、農業で自立できるよう支援する制度がある。この制度が本来の役割を果たし、若者が現地に定着し、農家として自立して行く幸せな事例も見聞するが、一方、挫折し、失望して現地を離れざるを得ない若者も多いのが現実である。その原因の一つは、補助金が本来の役割通りには使われず、若者が制度の恩恵に十分浴していないことがある。また、若者は就労契

約により、労働時間に一定の制約がある。茶づくりの繁忙期に、役所がこの労働規定を厳密に守らせると、若者は十分な働き手とは見なされなくなり、農家との間の信頼関係が失われ、溝ができるといったことがある。このような事情を関係者がよく理解し、農業を志す多くの若者が育って行けることを上原さんは願っている。

＊ ＊

茶をテーマとした過去の雲南懇話会での講演一覧（講演の新しい順に記載、肩書は講演当時）
「茶と食の故郷を雲南に求めて」大森正司（大妻女子大名誉教授）、2018年7月

「茶と雲南—中国と日本の資料、医薬書から見える茶の姿—」岩間真知子（京都大学 Global COE 研究員）、2017年7月

「茶の原産地としての雲南」松下智（茶の文化振興会豊茗会会長、元愛知大学教授）、2015年12月

「ブラジルの茶園、茶産業」上原美奈子、2015年10月

「タイ・ビルマ漆器と中国虫糞茶—ビルマウシンの生産とタイ北部のビルマウシ林を調べる。中国南部の虫糞茶とは何か?—」渡辺弘之（京都大学名誉教授）、2014年12月

「ベトナム北部の茶と米食文化—首都ハノイを中心として—」長坂康代（人間文化研究機構共同研究員）、2013年3月

「雲南 Field Work 2011 の報告：Chapter. Tea—茶文化交流の向こうにあるもの—」上原美奈子、2012年7月

「お茶—起源、歴史など、あれこれ話—」左右田健次（京都大学名誉教授）、2012年4月

「タイ北部・発酵食用茶『ミアン』—伝統的茶栽培村の変容／発酵茶文化の系譜—」佐々木綾子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修士課程）、2008年6月

会員動向

訃報

江口和男 2021年11月15日逝去

上久保達夫 2022年3月逝去

川瀬裕史 2022年4月13日逝去

会員異動

根岸哲生 自宅住所変更

三輪佳宏 自宅住所変更

和田泰三 勤務先変更

編集後記

この五月の連休、残雪の菅平高原四阿山（あずまやさん）に登りました。登山道から北西の方向には焼、火打、三田原、妙高等京大ヒュッテの山々がまだまだ白く輝いていました。頂上には、思いもかけず、群馬県嬭恋村の標識がありました。嬭恋村はAACKの財源の一つになっている雪山讃歌の発祥の地です。眼下には嬭恋村全域が開けており、雪山讃歌が作られた鹿沢温泉は四阿山頂上からはるか南の山麓にあります。雪山讃歌が作られた経緯は、AACK HP のお知らせ欄の2020年3月の記事に記載されていますので、ご一読ください。来年は西堀榮三郎生誕120年にあたります。加えて、今年は今西錦司生誕120年です。

（事務局・永田 龍）

101号にご執筆の皆様、また吉野さん追悼関

係の編集に多大なご協力をいただいた上田豊さん、ありがとうございました。

（編集人・横山宏太郎）

次号原稿締め切り 2022年7月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2022年6月15日
発行者 京都大学学芸部 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
（株）土倉事務所